

出品する位の名匠の域に達し、非凡な軍人、政治家、文化人とを兼備した、一種の傑物ではあるが、その若い時からの足跡は、政界遍歴者として有名である。即ち、最初は、保守黨に籍を置いて活動し、随分黨内攪亂を企て、次で、自由黨に籍を移して、海軍大臣、内務大臣等の位置を占め、ロイドジョージの内閣が倒れる頃から、保守黨に復歸して、大藏大臣となり、最後に無所屬で再び海軍大臣となり、遂に總理大臣の位を贏ち得たと云ふ經歷の持主である。

このチャーチルに關して思ひ出すのは第一次世界大戰の始まつた時だ。

私は海軍大佐時代、大正二年から英國大使館附武官として、ロンドンに居つたが、その翌年の夏に歐洲の風雲頗る逼迫、今にも大戰が始まりさうな形勢であつたので、私は英國海軍省に對し、英國大艦隊に乗艦方を申出たのであつた。

英國海軍省では初めは難色があつたが、兎に角日露戰役中には、英國海軍將校が二名、我が艦隊に乗艦して居つた實例もあり、其の交換的措施としても開戦の際は是非共、私の希望を容れなければならぬのであつた。

ところが一向返事が來ない。

そのうち、いよいよ開戦となつた。時に、チャーチルは海軍大臣であつたが、不意に、チャーチルから私に、

「一寸來て貰ひたい」

との招きがあつた。

「さては、いよいよ乗艦を許すのか」

と思つて、海軍省へ出て行くと、通された部屋が、いつもと違つて、素晴らしく立派な廣い部屋である。

「どうぞ」

と云はれて、中へ入ると、その部屋の突きあたりに長いソファがあつて、一方に、海軍大臣たるチャーチル、一方に軍令部長であるルイ・バツテンベルグ親王が控えて居り、その真中へ自分は招ぜられたのである。自分は實に妙なことだと思つた。

こゝで一寸、當時の英國軍令部長のルイ・バツテンベルグ親王のことを記すとその人は積極主義の方で、海軍部内でも非常に人望があつた人だ。

元來が、獨逸の皇族で、子供の時から英國に居り、英國海軍兵學校の出身であり、ビクトリア女皇の孫の内親王と結婚されてその娘さんは、スエーデンの皇太子殿下の妃となつて居られ、日本に來朝された時は、私は吳鎮守府司令長官として出迎へ宮島に御案内申したこともある。

このやうに英國で育ち、全く英國人となつて居り、實際に手腕もあり人望もあつた方が、種が獨逸であると云ふので、あの大戰の場合ではあり、どうも調子がしつくり行かない、夫れで自分から軍令部長を辭退せられ、其職をジエームス・チャクソン大將に譲られたのであつた。

夫れのみならず、バツテンベルグと云ふ宮家は元來獨逸出であつて面白くないと云ふので、マウントバツテン侯爵と改名せられ、純然たる英國の貴族となられたのである。

最近傳へられる米、英、カナダ、ドゴール派合作の軍隊が、——佛國北岸ジエップの上陸作戦に多大の損害死傷を被つて敗退した出來事がある。その海上指揮官がマウント・バツテン海軍大佐で即ちあの時の英國軍令部長のルイバツテンベルグ親王の子息である。

それは、後々の話。

さて、チャーチルと軍令部長のバツテンベルグ親王の間の、同じソファへ私は腰を卸ろして、一應の挨拶が済むと、チャーチル海相はニコ／＼と笑顔を私の方に向けて、

「愈々獨逸と開戦となつたが、太平洋の方面では、フォンスビー司令官の率ゐる獨逸東洋艦隊が一時活動して居たが、日本には巡洋戦艦金剛などが頑張つてをるので、夫れに追はれて、漸次米國西岸に行動し來り、その内の快速巡洋艦ライプチヒが北米沿岸に迫つて、交通の破壊を始めたやうである。

實はシャトル方面には、英國のレインボーと云ふ三千噸位の小さな舊式巡洋艦

しか配備してなく、獨逸のライプチヒに暴れられると、どうすることも出来ない。聞くところによると、あの方面では貴國の軍艦出雲が行動して居ること、その出雲で、獨逸の軍艦を追つ拂つて頂きたいのだが——」

と頼み込むのである。そこで、私は、

「成程、現在日英間は攻守同盟ではあるが、我が日本は獨逸に對して宣戰の布告はしてゐないのであるから、敵國と定まらぬものへ、今貴官の御依頼の様な攻撃を加へると云ふことは絶対に出来ない」と、きつぱりことわり、

「今、青島の問題で日本から最後通牒を獨逸へ送つてあるから、その成行如何によつては御期待に添ふ様になるかも知れぬ」

と云ふと、チャーチル海相は、

「それでは已むを得ぬ、出来るだけ早く、獨逸への宣戰が實現せられる様希望する」

と云つて、この交渉は之れで済んだが、チャーチルは、このやうに、無理でも何んでも、人の禪さへあれば夫れで相撲を取るのではなしに、人に相撲を取らせやうと云ふ遣り口、まことに勝手氣儘な男で一應當つて見たのであらう。

その後の話であるが、チャーチルは大戦中、日本の巡洋戦艦金剛や比叡に、一艦でも二艦でも、北海方面へ出動して貰へないかと希望を漏したと云ふ噂を耳にしたこともある。彼れ一流の遣り口には全く油断も隙もならないのであつた。

河豚喰つた報ひに嗤ぐチャーチル

支那事變の未だ勃發せない昭和十二年の春であつたか、當時英國の大藏大臣であつたウインストン・チャーチルは、何を思つたものか、

『日本へ忠告』

と題して、米國の雑誌コリヤースに投書して次のやうな意見を吐いた物である。「歐米の如何なる國と戦つても日本は有利な立場に居る、たとへば英國は外國

と戦争を開始する場合、国内には必ず戦争反対者が居る、此の前の世界大戦に於て、英國は國家の存亡を賭して獨逸と戦つたが、その際でも、英國國內の平和論者は政府を困らし、英國の商人は戦時成金となるに忙しく、英國の勞働者はストライキを起したりした。

これは現在の日本にはあり得ない處であつて、日本政府は二十四時間以内に完全國內を統制してしまふのであらう。

歐洲各國では、今尙革命運動が地下に潜んで居り、いざ、戦争となると、これを好機として奮ひ立つのである。日本には、その危険が絶対に無いのである。

日英同盟は廢棄されたが、それは日本と英國との間の交情が冷却したのではなくして、日本と米國との關係が悪くなつた爲である。

この日英同盟の失はれたことは世界の不幸であつた。だが、これは英米兩國が互ひに争ふと云ふことに比較すれば、それは小さいことである。自分は、日英同盟には賛成であるが、さりとて、それが爲に、英國と米國とが争ふと云ふ場合に

は、自分は躊躇なく日英同盟を棄てる。

今日、世界に於て、海上に戦線を敷き得るものは、日、英、米の三國あるのみである。幸ひに、此の三つの海軍國は、廣い大洋によつて隔てられ、その大洋を渡つて攻撃に行けば、距離の爲に、戦闘力が三分の一に減ずる。こゝに日本が東洋に君臨する理由がある。

今日の海軍は、英國も米國も日本を攻撃する力はない。

英、米は聯合しても、三四年の努力をしなければ、東洋に海軍を派遣することは出来ないのである。

日本は、絶対に安全な存在である、こゝに日本の力がある。

ところで、此の力は日本としては悪用してはならない力である。

日本は『亞細亞人の亞細亞』とスローガンを掲げる。もし、『亞細亞が日本人の亞細亞』と解せられるに到つた時は、日本は危険な道を踏んで居るのだ。

勇敢なる日本國民はよく忍耐して、英國始め、他の諸國と善隣關係を維持する

ことを希望する。

今日は戦争を始めることは容易な事だ、しかも、その戦争を始めた者は、どうして、それを終らしめるかを知らないのである。

歐洲第一次大戦の例を見ても、戦争を始めた人と、終らしめた人とは、全く別の人であるからだ」云々。

と云つて居る。

餘計な忠告などは眞つ平だが成る程言ふことは尤もな所もあり、チャーチルはその時分から、一應日本を知るの明があつたのである、而して又米國と餘り關係を密にすれば、段々と米國にしてやられ、結局夫れが英國の命取りとなることも百も承知してゐた、だからチャーチルは、飽迄日本を敵に廻はしたくは無かつたし、實際に夫れを極度に警戒して居つたのである。

處が河豚は喰ひたし、命は惜ししで、樞軸側との戦争の旗色が、悪くなつて來ると、遠大の世界政局の見通しよりも、差當つての身の廻りの助け舟が大切に、

背に腹は換へられず、遂に日本を袖にして、米國の懷に飛込んでしまつたのであつて、大東亞戰に迄發展して最早何んとも抜き差しは付かないのである。

而して當然の歸結として猪ではないが、河豚喰つた報ひは早晚英國を見舞はなければ止むまい。結局チャーチルの舊世界觀を固守する頑迷と、國家に對する忠誠を缺ぐ自我の性格と、彼に全幅の信頼を捧ぐる英國民とが、英帝國を亡ぼすに至るであらう。

政治家でないチャンバレン

現首相ウインストン・チャーチルの前に、首相であつたネヅイール・チャムバレンの父親ジョセフ・チャンバレンのことは、前にも一寸觸れて置いたが、元來が保守黨と自由黨を股にかけて來た政界の惑星で、その鋭い感情と旺盛な精神を以て、遠慮なく所信に邁進するので、内閣からも、政黨からも爆彈的存在として取扱はれた程であつて、或る時は傳統ある英國上院の廢止を要求したり、或る場

合には皇帝の健康を祝する乾杯の時に坐つたまへ、起たなかつたり、一寸常規を逸したやうな、行績もあつた。

然し晩年には年若な美人の妻君の御伴をして、氣の向ひた社交の席に、時たま顔出しする位で、極めて静かな餘世を送つてをつた。兎に角よい子息を持つたもので長男のオーステンは、既に政治家として立派に世に立つてをり、弟のネヴィルの方は、その性格才能の上から政治家には向かぬと云つて、父の注文もあり始めから實業界に身を投じ成功して産を爲したのである。

世の中は妙なもので、そのネヴィル・チャンバレンが老境に入つてから、政界に顔出しする様になり、纏て政黨一方の首領となり、遂に辣腕の父も俊敏の兄も贏ち得なかつた、首相の地位を占むるに至つたのである。然し人間の運命は、何が幸か何が不幸かは棺を蓋ふて後始めて定まるのであり、哀れネヴィル・チャンバレンは徹頭徹尾煩悶の首相に終始し、心にもない世界大戰に英帝國を引ずつて置いて、自身は一と足先に冥土に旅立ちしてしまつたのである。

チャンバレン首相の死期を早めたミュンヘン會議及びボイランド問題に關し、昭和十三年九月、ニューヨーク新報で面白い素つ破抜きをやつてをる、その傳へる處によると、

「チャンバレン英首相は、チエッコ問題を犠牲にするか、大英帝國の權益を犠牲にすべきかの岐路に立つた、その際に突如として英國の諜報機關から入電があつた、この諜報機關の探知した報告と云ふのはこうだ。

若し、英國が歐洲大戰に参加するならば、日本は直ちに、その優勢なる陸海軍を以て、先づ、香港に、更にシンガポールに、更にマレー半島に、印度に、進んで濠洲を攻撃すること明白となつた。油田の豊富な蘭領東印度をも攻めとるであらう、と云ふのである。

斯くてチャンバレンも心境忽ち一變し、英國も、遂に從來の態度を改めてチエッコを見捨てることに決意し、チャンバレンは例の有名なコーモリ傘と一緒に、ミュンヘン會議に臨み、ヒットラーの前に、腰を駈めてしまつたのである。

だが、その後の、更に引き續いてのポーランドの問題には、流石の英國も手が引けず、夫れにチャーチルの横合ひからの絶對強硬論も手傳つて、小心で正直なチャンバレンは、已むに已まれず、開戦を決意したのであつた。

しかし、これはチャンバレンの本旨ではなかつた。政治家でないチャンバレンは政治家程の圖々しさは持合せなかつた、云々と述べてをる。

然り、彼れチャンバレンはそんな太つ肚はない、箭は既に弦を離れた後も悶々の情に堪へ難く、チャーチルに内閣を讓つて、隱退後も幽鬱遣るに由なく、遂に病を得て倒れてしまつた」

往年の英國艦隊

ベレスフォード大將とカスタン大將の話

山本權兵衛大將が英京に來られて以來、日英間の攻守同盟に就ての必要上種々軍事協定の協議が進められ、英國の海軍當局とは一段と懇親の度が進んだ。

私と松村龍雄中佐（故中將）とは相前後して、豫てポーツマウス軍港にある英國の海軍大學に入學して既に其業を終えたのであるから、之れからは、英國艦隊の實地作業を修得したいのであるが、單に大演習の時期とか、射撃演習の場合のみに艦隊に乗艦したのでは、物足りないので、どうしても平素の訓練や、巡航の時に相當長日月に亙つて、英國艦隊に乗艦し、その實際を視察したいとかねがね念願して居たので、此の好機を逸してはと、松村中佐と兩人で山本大將に希望を述べて御願ひしたのである。

山本大將は、豫て親交ある英國軍令部長フィッシャー元帥にこの事を依頼されたが、此のフィッシャー元帥は、恰も日本の山本權兵衛大將の如き立場にある人でその聲望と云ひ手腕と云ひ、英國海軍部内では並ぶ者なき大權威者で、吾々の願望はその一諾で忽ち許可に相成つて、私と松村中佐とは當時の常備艦隊である海峽艦隊に乗艦巡航することゝなつたのである。

この時の海峽艦隊司令長官は、ロード・チャールズ・ベレスフォード大將で、此の人は日本へも來たことのある愛蘭の貴族出で、寧ろ政治家肌の雄辯家だったが、晩年には貴族院に出て屢々海軍大臣のチャーチルに喰つて掛り、大に議場を賑はしたものである。

又、艦隊の司令長官時代に其麾下の司令官サー・バーシー・スコット中將と艦隊日常作業のことで、意見の相違から大衝突をして大評判であつた。スコット中將は誰知らぬ者なき有名な射撃家で、英國否世界の海軍射撃術を劃期的に増進した本家本元である。

射撃や狙ひ方の方法や、射撃術に關する器具の發明等凡そ「彈を命中させる」と云ふ點には、全力を傾注して奮闘努力能く其効果を發揮せしめた人で、何事も工夫家であり、急進派であつた。

嘗て潜水艦が世に現はれ始めた時分逸早く潜水艦萬能、戰艦廢止論を唱へて新聞を賑はし、航空機が盛んになつて來ると、更に航空機萬能、海軍廢止を發表して世間を驚かすと云つた突飛な名物男であり、私も屢々食事を共にして大に砲術問題を話し合つたことがあるが、その海峽艦隊司令官時代に艦隊射撃訓練の最中にベレスフォード司令長官より命令があつて、來週始めに獨逸のカイゼル(皇帝)が倫敦訪問の爲め着英の筈であるから艦隊は今から射撃訓練を中止し歸港の上、艦體の塗換や、掃除手入等に從事すべし、と云ふことであつた。

處がスコット司令官は何んだ、獨逸のカイゼルが來るからつて、ペンキ塗りして艦の御化粧にも及ぶまい、夫れ丈けの時間があれば射撃訓練の勵行こそ大切だと頑張つて容易に服従しない。

夫れ計りでなく艦隊の陣形運動中に右廻れの信號命令のあつた際、スコットの隊は左廻りをやつたとかやらぬとか、命令服従問題に搦んで却々面倒な問題となり、スコット司令官は遂に職を去ることになり、之れが動機で間もなく現役を退くことになつた。

話は一寸横道にそれたが、このベレスフォード司令官の麾下の第二艦隊には司令官としてカスタンス中將（後の大將）が居られ、私はその艦隊の戦艦コンモンウエルスに乗艦した。

此のカスタンス大將と云のは、一種の奇骨漢であり論客であつて、豫てから戦艦の高速力反対派の驍將で、戦艦は攻撃力、防禦力が最要で速力は他國の戦艦と同等程度で澤山である。高速力は、逃げる爲に役立つに過ぎないと云ふのが持論で新聞や雑誌にも投書して、盛んに海軍省を攻撃することもあり、なか／＼手硬いとかどの人物であつた。

私は、此のカスタンス大將と、度々會つて居る中にすつかり知己となつたが、

私は又、反対に戦艦高速主義の急先鋒を以て任じてをるものであるから、この問題で議論を上下することも随分多かつた。

此のカスタンス大將は、彼の薩英戦争當時、英艦隊旗艦ユーリアラスに少尉候補生として乗艦してをり、親しく合戦に従事したと云ふので、彼の口から鹿兒島灣砲撃の實戦談を聞いた。

此の薩英戦争は、日本の海軍にとつても、日本の歴史にとつても重大であるが更に、世界の海軍史上にも劃期的なものであつたことが判つた。で先づ順序として、薩英戦争の経緯を述べやう。

薩英戦争と英國艦隊の失敗

薩英戦争は、生麥事件から起つたのである。生麥事件と云ふと、薩藩主島津久光が、勅使大原重徳卿と共に江戸に来て、その歸途、文久二年八月二十一日江戸から、東海道を生麥村に出た時、英國人四名が騎馬で、此の大名行列を横切らう

としたのである。

島津久光の家臣岡野新助は大いに怒つて、一人を斬り倒し、三人を傷けた。この三人が男で、後一人は女であつた。驚いたのは神奈川奉行阿部豊後守、急いで島津久光の一行を程ヶ谷へ追つかけ、加害者を求めた。が、久光は

「自分で責任を以て處置して、決して幕府に累を及ぼさぬから」と云つて、犯行者の引渡を拒絶した。

英國代理公使ニールは、英本國に急報して、幕府に嚴談した。そして、文久三年三月、英國東洋艦隊が入港したのを機會にニールは、次の要求を提出した。

- 一、加害者を嚴刑に處すべし
- 二、償金十萬磅（金三十萬兩）
- 三、遺族扶助料一萬磅（金三萬兩）

を支拂へ、さもなければ、直ちに江戸と鹿兒島を砲撃すると嚴談して來た。幕府は大いに驚いて上洛中の將軍に急報して、指揮を乞ひ遂に五月八日を以て、償

金を支拂ふことを約束したが、その時に到つて、朝廷の命によつて、之を中止したので、ニール代理公使は大いに憤りて強硬の決意を示し、艦隊司令長官クーパーは、直ちに戦闘準備を爲したので、幕府は驚愕措くところを知らず、遂に償金十萬磅と外に、第二東禪寺事件の償金一萬磅を支拂つて幕府の關する限り一應免は附いた。

これに味をしめた英國は、加害者の處刑と、被害者慰藉金二萬五千磅を支拂へとの要求を強行する爲め、艦隊司令長官クーパー中將が旗艦ユリアラス以下七艦を率ゐて、横濱を發し文久三年六月二十八日威風堂々鹿兒島灣に入り、灣内深く碇泊して、

「二十四時間を期して諾否を回答せよ」

と薩藩に迫つたのである。

英國は例によつて艦隊の大威容を示して、恫喝の大談判を始めたのである。英國は世界到る處に於ていつも此の手で成功して來たのであるが、我が薩藩には、

骨があつて斷乎として此の要求を拒絶した。

夫れのみならず、始めから決戦の覺悟を定め、決死の若武者百餘名は、商人に變装して八隻の小船に分乘し、英國艦隊の要求を幸ひに、野菜賣りや西瓜賣の風を装ひ、敵艦内に斬入つて、敵艦内の將士を切倒し、英國東洋艦隊を手捕りにしようとしたのである。

其の豪膽銳氣、正に天を衝くの慨があつた、決死の若武者の中には、若かりし大山巖元帥、西郷從道元帥、伊東祐亨元帥、海江田信義子爵、奈良原繁男爵等も加はつて居たのである。

もつとも、此の計畫は英艦隊側の警戒嚴重の爲實施には至らなかつたが、以て薩藩の意氣を察するに足るのである。

英國と薩藩との、談判は固よりまとまらう筈はなく七月三日、遂に鐵火相見ゆることゝなつた、陸の砲臺と艦隊との大合戦である。

かうなると、艦隊側の不利な事は當然であるのみならず、威嚇が外れたので、

艦隊側は、本式の戦闘準備が整つて居ないで、中には錨をまき上げる暇もないので錨鎖を切斷し錨を棄て、出動した軍艦もある位の周章狼狽振りであつた。

加ふるに荒天候で、灣内に於ける艦隊の運動も自由ならず、特に旗艦ユーリアスの如きは、出動が遅れて自然孤立に陥り、砲臺からの砲撃集中で、損害頻々死傷は續出し、艦長及び副長も艦橋上で戦死する等、全く泣き面に蜂で灣内を左往右往、辛ふじて砲戦を續けてゐたが、翌四日午後に至つて、遂に、灣外に退出し去つた始末であつた。

此の合戦に東郷元帥のお母さん、ます子夫人が、五十二歳の女丈夫として、激戦彈雨の中に、大鍋に豚汁を一杯こしらへて、十七歳で初陣の少年東郷平八郎をたづね廻り、その豚汁を届けたと云ふ逸話もあつた。

美に戀りた英の備砲問題

此の時の英國東洋艦隊旗艦ユーリアスの備砲は、十七サンチ乃至十五サンチ

の最新式アームストロング式後装砲であつたが、いよいよ戦闘に移り實彈發射をやつて見ると、その大砲の尾栓に故障が起きて、或は發射後尾栓が開かなかつたり、或は彈を込めた後で尾栓が閉らなかつたり、多くの大砲が射てなくなつて大失態を演じた。

この鹿兒島砲戦の結果が動機となつて新式の後装砲は、實戦には不適當であるとせられ、各國の戦闘艦等は、再び巨大な前装砲を裝備する様になつて、こゝに世界は再び前装砲時代に立戻ることになつたのである。

その後、十數年は後装砲は顧みられず過ぎ來つたが、やつとクルップ式の横栓や、アームストロングの縦の尾栓が考案せられたので、明治年間の初期になつて再び後装砲を用ひるやうになり、以て今日に至つたのである。

美に懲りて胎を吹き過ぎた傾はあるが、兎に角鹿兒島の砲撃は、海國の國防は海軍に依らざる可からずと云ふ實教訓を、吾人に示したものであると同時に、種々な意味で海軍殊に、海軍の備砲問題に就いて、一新紀元を劃したものと云へよ

う。カスタンス大將は、私に向つて、當時を回想し、感慨深く詢々として物語つたのであつた。

英艦上の競技悲喜劇

カスタンス大將から薩英戦争の追憶談を聞いた頃、私はよく同大將の海峽艦隊旗艦ハイベルニヤの晩餐に招かれたが、その席に戦艦ジユビターの艦長アイボスノット大佐も合ひ客として來艦された。このア大佐は却々腕つ節の強いのが自慢で、若い士官が何か云ふと、

「何をっ！」

と冗談半分に忽ち、ボクシングの型を示して、拳骨を突き出すと云ふ癖のある誠に無邪氣な面白い男であつた。

それは、夏の夕でまだ明るい時であり、晩餐を終つた一同はハイベルニヤの後甲板に上つて、三々五々喫煙とコーヒーで雑談に笑ひ興じて居つたが、ふと、ボ

クシングと柔道の比較論が出た。ボクシングを説くのは矢張アーボスノット大佐そして柔道は日本士官の私が居るからであつた。

その時、私は、金筋のついた通常禮服（フロックコートの型）を着て居たが、奇麗に掃除手入れしてある、つる／＼した甲板に心を動かされたものか、急に身を翻して甲板に一寸手をつくると、同時にくるりと宙返りを試みて、ひよいと向ふに立つたのである。

これを見た附近の士官連中は驚いて、

「これは不思議だ、それは何ですか？」

と、私に問ふのであつた。私は

「これは柔道の型で甲板の上で一寸試して見たのだ」

と答へると、アーボスノット大佐は、

「ふうむ、もつと柔道が知りたさ」

かう云ひ出した。そこで、私は、

「では、型を見せてあげやう」

と云つて、つと、ア大佐の前に進んで、その襟を取らうとした。が、此の腕の節自慢のア大佐が、とたんに、二三步退つて、手を振るのだ。私は

「いや、痛くも何もないから！」

かう云つても、堅い甲板に叩きつけてもされるかと思つて、ア大佐は、

「いや、それは、どうぞ若い者に！」

と巧たくまに鋭鋒を避けて、話の上で柔道談が盛に持てはやされた。このアーボスノット大佐は其後、中將に進みセツトランド大戦に、巡洋艦戦隊の司令官として、勇ましくも戦死を遂げた。

又、私の乗艦コンモンウエルス艦内の士官室での話であるが、食後に例の果物と一所に胡桃くるみが出る、胡桃は却々堅いもので、クラッカー（胡桃を割る道具）でがちりと破つて實を取り出すものである。それを、ふと悪戯いたづらの氣持で、私は指先の竹筥しゅっさいで、此の堅い胡桃を叩いて見ると思ひ掛けなくボンと破れた。實は自分に

も始めての試みであつた。

「あつ！ 指先で胡桃を破つた！」

と、居並ぶ食卓の士官達は大驚きであつた、がいつしか夫れが艦隊の評判になつたと見え、他の艦の士官室から、自分を晚餐に招くので往つて見ると、この竹篋で、胡桃を破るのを見せてくれと云ふのであつた、どうも、これは妙なことになつた。實際いつも調子よく胡桃が破れるかどうか不安なので、始めは、ことわつて居たが、やつてみるとその都度よく破れる、實際英國の胡桃は日本のに比べると餘程軟かいと見える。夫れでしまゝには艦隊の士官達は、

「之れは柔道だ、柔道だ」

と、竹篋も、たうとう柔道にしてしまつたのも、一つの餘興であつた。

ところが、此處に一人の面白い相手が現はれた。それはコンモンウエルスの航海長で、フアンシヨールと云ふ少佐だが

「日本の安保君が指で胡桃を破るなら、俺は額で破つてみせる」

と名乗つて出た。士官室の連中は、これを聞いて大喝采、フアンシヨール少佐は負けん氣で、衆目の集まる中で、卓上に胡桃を置いて、さて、勢込んで、額を、ぐわんと叩きつけた。

と、どうだらう、胡桃は破れずに、額は割れて、鮮血淋漓、純白のテールカパーを忽ち茜色に染めてしまつた。全く笑ふに笑へない悲喜劇であつた。何でも前に試した時には成功した趣であるが、衆人環視の人前ではあり餘り意氣込んで反つて失敗し、すご／＼と傷を抱へて、軍醫室へ飛び込んだのは寧ろ氣の毒であつた。

英國艦隊の表裏

政争の餘波横須賀に及ぶ

思ひ出すと、それは明治三十一年の秋、英國戰艦ヴィクトリアス一萬五千噸が横須賀軍港の船渠に入渠した事件であつた。

當時の横須賀の船渠は、一萬五千噸はさて置いて、一萬噸の艦も、這入つたことがない。そこへもつて来て、どう云ふ譯か英國から突然、在東洋の戰艦ヴィクトリアス入渠の件を交渉して來た。

そこで我が海軍當局に於ては、横須賀軍港の大船渠の寸法や、形状とヴィクトリアスの艦體船腹の形状や吃水等を、篤と調査研究の上入渠可能の見込が付いたので、その旨英國政府に快諾を與へ、入渠の準備に取掛つた。何に致せ、その船渠はヴィクトリアスを入れるに、寸法がきち／＼であつて、少しの餘裕がないの

である。

申す迄もなく、艦の方では搭載の砲彈を始め汽罐の水を抜くとか、錨や錨鎖を卸ろすとか、重量物は出来るだけ陸上げして、艦體を軽くし吃水を減らすと云ふので一方ならぬ混雜、夫れでもやつと準備が整つたので、今度は我が海軍の操艦の名人新井少將や、その一番弟子と云はれ、これも操艦の第一人者である酒井正房大佐とが請合つて、とても人間業とは思はれない程の巧妙さを以て、美事に横須賀の船渠に入渠させたのである。

英國の艦隊司令長官始め司令官艦長等は、艦隊を横濱に回航し、そこから横須賀に出張して、此の千番に一番の大切な、入渠實況を視察檢分すると云ふ騒ぎ、東京からも、海軍省の主腦や、島村速雄中佐其他が熱心に見届けに來られた程である。

實際艦の外飯と、ドックの石崖との間隙が形容すれば五分とすかないので、ドック内の水が壓されて外方に奔流噴出する光景は、洵に物凄いものであつた。

何故、そんな大きな艦を、無理に入渠させたかと云ふと、これが英國の政争の一つの現はれであつたのだから驚くではないか。

元來英國と云ふ國は、二大政黨が争ふことによつて立つて居る國であり、その當時ソルスベリーの保守黨とグラッドストンの自由黨とが常に争つて居た。丁度その頃、英國議會で在野黨の一人は政府を攻撃して、

「政府は最新式の一萬五千噸級の戦艦を續々東洋へ送つて居るが、戦時は兎も角として、平時としては考へ物ではないか、實際東洋には、香港にも、シンガポールにも、コロンボにも、濠洲にも、大艦を入れて修理する船渠はないではないか、英國は固よりとして外國にもあるまい、それでは萬一損傷のあつた場合如何する考か、餘りにも思慮を缺いだ政府の失態ではないか」

と鋭く詰問の矢を放つた。

全く急所を突かれたので、政府當局は大狼狽、そこで窮餘の一策として、思ひ付いたのが日本の横須賀軍港にある船渠で、東洋では一番大きいのであり、多少

無理をすれば或はヴィクトリアスの入渠が出来るかも知れぬ、兎も角も日本に鈍つて見ようと廟議一決して、扱こそ外交チャンネルを通じて内々で、日本へ交渉に及んだ次第なのである。

處が幸にも、否な寧ろ意外にも、日本から入渠可能の回答があり、鬼の首でも取つた程に、感喜したのが英政府當局であつて、早速にも議會の次回の本會議で堂々と、

「英國の最も親善なる關係にある日本帝國の横須賀軍港には、現在我がヴィクトリアスが、ちやんと入渠して居る、政府は豫め見る所あつて、毎時も夫れく手配をしてをるのである」

と大見得を切つて、見事反對黨の質問を粉碎して凱歌を擧げ、同時に國民の懸念をも一掃したのであつた。このことで、我海軍は亦、世界に其の操艦技能と軍港設備の卓越を認めさせたのであるが、とにかく、戦艦の入渠迄が政略に伴つて起ると云ふ英國であるのは面白い様で一面人を馬鹿にした話でもある。

発見した英海軍の不面目

此のウキクトリアス横須賀船渠入渠の時に、私は、横須賀在勤であつたので親しく立會つたが、この時、誰も知らぬ事で、私が潜かに氣のついた大切なことがあつた。

それは、ウキクトリアスの副長が、毎日々々艦の總員を督勵して、彈丸を積卸ししたり、重量物を釣り上げたりして、汗を拭き乍ら艦外の運搬船へ運び出して居る。そして絶へず艦の吃水を調べながら、未だ豫定の吃水に達しない、今少しの辛棒だと勵しながら、尙ほも作業を繼續してゐたが、扱て愈よ豫定の吃水迄艦體が浮いたと云ふので、一と休みと云ふことになつたが、驚いたことには艦腹の吃水線の印しの數字が、一段間違へて書いてあつたことが発見された。

大體、吃水は半呎置きには白塗具で、線を引ひて水入りの深さの數字が書いてある。この線を一本間違へると六時だけ違つて来る。これは例へば吃水が實際十

九呎半である處に二十呎と書いてある譯である。

これは、ウキクトリアスが東洋へ出發の前に、英國のボーツマウスの軍港か何處かの船渠で、艦底塗り換への際に間違へて、吃水線の數字を誤記したものに相違なく容易ならぬ失態である。

ウキクトリアスの副長も全く恐縮して、丁度居合はせた私に對し

「英國の權威に關する、大失態だ、全く恥さらした」

と苦笑して居た。私は自他共に許す世界一の英國海軍でも、探せば缺點はあるものだナと、つくづく感じた。

元來、軍艦でも商船でも、此の吃水のマーク程、航海上大切なものはないのである。

此の横須賀の入渠の場合には、吃水の誤記の爲に若干噸餘計に重量物を積み卸して、無駄な時間と勞力を費したゞけで事が済み別に大して故障はなかつた。が、しかし、若し反對に、深い吃水を誤て淺く現はして居ると、入港とか海峡

通過の場合などに、或は坐礁する様なことが出来て、重大な結果を齎らさないとも限らない。

畢竟するに軍艦の吃水を間違へるなどは、その國の工廠の従業員が緊張を缺いで居るからで、苟も従業員なり監督者なりが持場々々に全力を盡して居れば、そんな間違ひのある筈はないのである。

一億一心、持場々々で最善を盡す程大切なことはないと今更ながら痛感するのである。

士卒と寢食を共にせぬ英將

第一次世界大戦が勃發すると、英國海軍では、海軍省の第二シロード、即ち艦政本部長であるゼリコー中將を、大艦隊司令長官に起用した。このゼリコー中將は、大戦勃發の前年、獨逸皇太子の結婚式に參列の爲めベルリンへ行つた時も獨逸の新聞は若し將來獨逸英戦争でも始めれば、今現にベルリンに滞在中のゼリコ

ー提督が、英國大艦隊を指揮して獨逸の艦隊に當るだらうと評判した程であつた。大正三年の夏危機が愈々迫ると、夫れ迄の大艦隊司令長官カラハン大將は、噂の通り轉任した、同大將は極めて素朴重厚で、戦に強さうな所謂船乗肌の武人として評判も良かったが、固より智將名將と云ふ人柄ではなかつたので、チャタム鎮守府司令長官に移され、代つてゼリコーが、大艦隊旗艦アイヨン・デユークに大將旗を繡した。

これは我國でも、日露戦争が愈々始まらうと云ふ直前に、我が聯合艦隊の司令長官日高壯之亟中將が、遽に舞鶴鎮守府に轉じ、舞鶴の東郷平八郎中將が、聯合艦隊司令長官の印綬を帯びられたのと、較や似通つた形であつた。

さて、第一次世界大戦が始まつて見ると衆望を擔つて立つた、此のゼリコーの遣り口が評判程にもなく、その對敵行動が何んとなく慎重に過ぎると云ふので、巡洋戦艦々隊を率ゐたビーチー中將の方が、艦隊の將兵の中では、寧ろ評判が宜しかつた。

當時、ピーチーは少將であつたが、人物本位と云ふ所から、第二艦隊司令長官として中將の心得を命ぜられ、然かも特に軍令が發せられて、夫れ以前に中將になつた先任の人もピーチーの麾下に艦隊司令官に就くやうに規定せられた。

この邊英海軍の人事は一寸妙な所があり、現に少將に進級した後半歳も一年も艦長の職に留つて居るものもあつた。英國海軍では、第一次世界大戦になる以前には、戦功があれば停年に拘はらず進級させる規定があつて、ピーチーの如きは、大尉時代軍艦「テリブル」で南阿戦争に陸戦隊に加はつて中佐（當時少佐の階級はなかつた）に進級し、その「テリブル」が東洋に回航すると、丁度團匪の北清事變が起つて、陸戦隊に参加し忽ち大佐になつてしまつた、明治三十三年の事でピーチー年齒僅に二十九年と云ふ若年であつた。

斯様な譯でピーチーは、司令長官と云つてもこの時は、四十を越えた計りの年少氣鋭でいつもきびくとして、機械水雷の區域や、潜水艦の出没する海面でも、思ひ切つて、乗り廻したり、敵出現の報でもあれば真先きに飛び出して、之に向

ふと云ふ風であるから艦隊の若い士官には甚だ評判が宜しかつた。

私もこのピーチー麾下の巡戦クインメリー（後にゼットラント海戦に撃沈せられ乗員全滅の不幸を見た）に乗艦してをり、時々長官旗艦にも訪問したが、ピーチーは「ナニ、參謀長や艦長達は非常に敵の潜水艦を氣にするが、吾々の艦隊は速力が早いから之を乗つ切りさえすればよい、餘り恐れるには及ばぬ」と語つて居つた。

ピーチーは後に元帥となり伯爵となり、貴族院では論客の方であつたが今は亡くなつた。

此のピーチー長官の夫人は、米國の金持の未亡人で、大金を擲つて、遊山用の大ヨットを求め、これを病院船に仕立て病室は僅に四つだが、内科醫、外科醫、齒科醫、各一人宛の名醫と看護婦を乗せ設備萬般善美を盡し、殊に夫人のサロンや食堂は却々立派に艦装せられてあつた。

これをピーチー夫人は、英國海軍省に寄附し、自分の夫、ピーチー長官の艦隊

所在地の、附屬病院船にする様條件が附してあつた。

此の大戦中は、ゼリコーの大艦隊は、主としてスコットランドの北端のスカバフローを根據地として居り、ピーチーの艦隊は、對敵上の便宜からスコットランドの東岸フォース河入口のロサイス軍港に居つた。即ち世界的に有名な、長橋フォースブリッジの橋脚に潜水艦防禦用の鐵網を張りめぐらし、その内側を艦隊の常泊場としたのであるが、白塗の堂々たる例の寄附の病院船は、河の南岸に近くいつも在泊して居るのである。

それで艦隊の入港中は、ピーチー長官は此の夫人の病院船に寝泊りして居た。私も一度、その病院船のピーチー夫妻の晚餐に招待されたことがあつたが、その贅澤さ加減には一寸驚かされた。

現に戦争最中である、而して艦隊幾萬の將兵は上陸も許されず、對敵の準備に日夜怠りない、その雰圍氣の裡に在つて司令長官のピーチーだけが、獨り此の善美を盡した夫人の船に起臥するのである。而かもそのピーチー長官自身も、何等

憚る所なく平氣でやつて居るのであり、艦隊の將兵も、全く没交渉で別に怪しむと云ふ風はないと云ふに至つては洵に驚くの外ないのである。

そも／＼士卒と苦樂を同じうし、寢食を共にするは、古來我國武將が、終始念としたところであつて、大楠公の言葉にも

「凡そ大將にして兵の苦勞を思はず、淫酒を好み、身をたのしむを、禮を知らぬ大將と云ひ、士卒と同じく食し、士卒と居を同じくし、將の威を失はず、士卒まだ休息せざる中は、鎧をぬがず、これ禮を知るの將なり」

とある。

勇敢で評判のよいピーチーも結局楠公の所謂禮を知らぬ將と評するの外なく、傳統を誇る英國海軍が一向強くないのも、この邊にその因を發してをるのでないか。

複雑なる英海軍の宗教行事

歐米の國民中、英國は特に宗教上の禮拜に几帳面で、軍艦内に於ても毎日、此の禮拜が行はれ、讀經を廢せず、平日は事業始めの午前九時頃一回、日曜は午前と午後二回行ふのを例として居る。

これについて、私が特に異様に感じたのは、私が嘗て海峽艦隊に乗艦中親しく見聞した艦内の實狀である。毎朝定時になると、總員整列して、その艦に乗組の牧師がバイブルを讀み聞かせるのが常例であつて、萬一その牧師の差支へのある時には、艦長が代つてバイブルの讀經を行ふのであるが、その神聖なるべき讀經の最中に、少數の將校や水兵が、士官室や、下甲板で、三々五々、或は寢轉び、或は喫煙し、雜談に耽る等、頗る不規則の様相を目撃したことであつた。

詳細聞き訂して見ると、その當時の英海軍にあつては、全將兵の六十八パーセントが英教徒であり、二十パーセントがローマンカトリック教徒であり、残り十

二パーセントが、種々異つた信教徒であつて、艦内の毎日の讀經に於ても、それは總員とは云ひ乍ら、實は總員の六割か、七割かの英教徒の集まりに對して行ふ次第であつて残り三割位の異教徒は、ごろ寝したり、雜談したりしてゐるのであつた。

そして、残り三割のこの異教徒は、日曜日にもその艦が港に碇泊してゐる場合には、艦では何等の仕事に加はらず、早朝から陸上に送られて、その教派の寺院に至つて禮拜すると云ふ、頗る復雜怪奇な實狀で、これを帝國軍艦に於て、毎日曜日きちんと服裝を調べ、當直勤務の外全くの艦内の總員が後甲板に集合整列し威儀を正して、艦長より

『軍人に賜りたる勅語』

の捧讀を謹承し、更に精神講話を聞かされると云ふ、最も嚴肅にして緊張せる重要行事とは、似ても似つかぬやり方で、軍艦勤務の毎日が、かやうな風では、舉艦團結、一死報國の氣分など、張り切る筈もなく、一朝有事の際には、軍艦の

士氣など、大よそ察せられるとはその當時密ひそかに感じた所であるが、今日の大戦に於ける、英國艦隊の戦さ振りに照らし、成程と領うなづかれる所もあるのである。

大東亞戦と英國

傳統と國民性の軍備

由來、日本人は戦さ上手で、昔から寡を以て衆に勝つと云ふ、戦さの上の獨得の長所を持つてをる。勿論夫れには敵の到底想像し得ない武器や戦法を仕掛けて敵の度膽を抜き虚に乗じて、壓倒殲滅の猛撃を喰はせる、用意と支度とが肝要なのである。

我海軍の軍備の建前も建艦方針も、一つに日本の傳統と日本人の特長を加味按配した、特殊の内容を盛つて居るものであつて、つまり日本の國情に即した、日本の國民性を具現した、日本獨得の軍備なのである。

然れば我海軍の軍費は米英の夫れに比し甚だ尠いのであるが、この筆法を以て御膳立を調へ、彼等に對して、一步も譲らぬと云ふ覺悟で、二十年間、鳴かず飛

ばずに、孜孜と努めて来たのであつて、その軍備が、今回の大東亞戦に於て見らるゝ通りの大捷となつて實現したのである。

彼の特種潜航艇の如き、又特別戦闘機の如き、何れもその一つの現はれであつて我國の戦艦と云ひ、巡洋艦と云ひ、航空母艦と云ひ、驅逐艦と云ひ、潜水艦と云ひ、何れも夫れ々々の特長を有し、尋常一様のものでないのである。

此の國民性の特長なるものは、極めて重要視すべきものであるが、其の性格を現はすのに、譬へば個人について云つても、ホトトギスの歌の様なのは仲々面白、即ち信長、秀吉、家康の性格を諷刺したもので

「鳴かぬなら殺してしまへホトトギス」

之れは短氣にして、何事も思ふが儘に振舞ふ信長を唄つたものであり

「鳴かぬなら鳴かせて見せう……………」

とは秀吉の世の中に不可能はないと云ふ自信を現はしたもので

「鳴かぬなら鳴く迄待たう……………」

は結局家康の老獪と堅忍を特徴づけたものであらう。

若し夫れ世界各國の國民性と云ふことになると、茲にその性格の現はれた一場の比喩がある。

盛り場の酒場に行つて、ジョッキに注いでくれたビールを飲もうとすると、その泡立つたビールの中へ、蠅が一匹入つてをる。

英國人は、何んだ、俺は蠅などは注文しないぞと叱言を云ひ乍ら、ざあーつ、と床に打ちあけて、新しいのを一杯持つて來させて之を傾け、すました顔で一杯だけの代價を拂つて出て行く。

米國人は、給仕に對して

「このビールには蠅が入つて居る、いくらか代金をまけておけ」と談判して蠅を取出して飲んで行く。

佛國人は、コップの中から、蠅をつまみ出して、靴で踏みつけ、給仕を呼んで「どうして此のコップに蠅が入つたのだ、此の蠅の這入るのをなぜ防禦しない

か、此店には蠅に付て注意する給仕は何人居るか」
等と給仕をつかまへて、二十分も三十分もビールを飲むのを忘れて理窟を云ひ議論して居る。

獨逸人は、蠅の入つたビールのコップを手にすると、その蠅を取出してさつさとビールを飲んで出て行く。

西班牙人は、蠅の入つたのを見ると、そのビールは飲まずに、代價だけ拂つてオトナシク出て行く。

ソ聯人は、蠅が入つて居ても一向お構ひなく、蠅もろとも、グウと一緒に飲んで平氣で出て行く。

そこで、我が日本人はその場合にどうするか、之れは銘々がなさることであるから、私は之れには觸れないで置こう。

たゞし、同じ日本人にも例外はある。私の先輩の明石元二郎大將や秋山好古大將の如き豪傑は特別である。

秋山好古大將は、蠅の入つたコップを口ににして、唇で、蠅を押へ乍らビールだけぐうと飲む。明石元二郎大將は、蠅も一緒に口に入れ、蠅だけをブーツと吹き出してビールだけ飲む。

銘々の性格は斯の如くに違ふのである。我が海軍は日本人の此性格の特長を利用して軍艦や兵器も色々と研究して作るし、國民性に合つた戦法をも案出して之を實現應用する、そこに日本海軍の性格もあり特徴もあるのである。

斯様にしていざ鎌倉と云ふ場合に、いつも向ふ處敵なしの概があるのである。而して現に戦争の眞最中に在りても、尙も敵に勝つ爲の兵器、軍需品生産増産の工風努力や斬新奇抜、敵を瞠若たらしむる新發明、新考案は寸刻の油断もなく繼續發揮を切要とするのは云ふ迄もない。

殉國の誠忠と白旗中心

これを歴史の上から見ても、國家の存亡興廢と云ふ様な非常時に際會すると、

その國の特異の國民性とか、その國の古來からの傳統的精神が、自からその鋒鏑を顯はし來るものであつて、國家が立つか立たぬかと云ふ瀬戸際には、傳統的精神と云ふ本當の底力程大切なものはないのである。

現下の大東亞戰に之を見ても、皇軍將兵の征く處、此の日本古來の傳統的精神が躍如として、到る處に横溢するのを認めるのである。

殊に、彼の眞珠灣攻撃の特別攻撃隊の九勇士の如きは、選ばれて、挺身、敵港灣に突入し、一舉に敵を撃碎して、悉くその大任を果したのである。而して辭世に曰く、

みはたとへ異境の海にはつるとも

守らでやましやまと皇國を

と云ひ、或は

「誓神明期必勝」と書し次で「眞珠灣頭望敵艦隊就大快舉明月亦朗」

と加ふるなど正に謙信の霜滿軍營秋氣清の慨を示し、或は

君がため何か惜しまむ若櫻

散りて甲斐ある命なりせば

と歌ひ

いざ征かん網も機雷ものりこへて

と意氣込み、或は又、

「皇國守護の第一線を承るは最大の名譽である、愈よ死ぬべき時生○き○る○べ○き○時が來ました」と母親に書き遺すなど、何れを見ても、まことに涙なくしては讀むことの出來ない熱誠崇高の遺書であつて、その悉くが、皇國の勝利を得る爲に、自分の身を犠牲として、それ丈けの仕事をなし遂げ、從容として死に就かれたものである。

ところが、敵の方の戰に對する觀念と云ふものは、全然我國とは反對で、なるべく、血戰を避け、自分は甚だしき損害を蒙らぬ範圍に於て、相手に打撃を加へ様と云ふ、義務的、打算的戰法に終始して居るのである。

彼の英國の總司令官ウエーベル大將の如きは、シンガポール危しと見れば、直ちにそこを脱出して、ジャワに移り、ジャワも不安と見れば、何時の間にか印度に飛んで、後は野となれ山となれで、済して居る。

又、ヒリツピンに於ける米國總司令官マックアーサー大將の如き、平素の廣言にも似ず、身危しと見ると、忽ち本據の比島を捨て、こそくと濠洲に夜逃げをするに至つては何とも評の仕様がな。

苟くも主將ともあらうものが、自己を犠牲にして、大局を制すると云ふやうな點に就いては何等考慮する處なく、たゞ、自分の保身、生命を全うするに、これ急なりと云ふ實狀では、部下幾萬の將兵が、死を賭して、敵に當るの氣概を示し得ないのも無理はないのである。

更に又、香港戰に於けるヤング總督が、部下に一萬五千の精兵を有し乍ら、大急ぎで、白旗を掲げ降服した如き、シンガポールのバーシバル將軍は、無慮七萬幾千の大軍を擁し乍ら、刀折れ、矢盡きたりと號して、忽ち白旗を繭し、又、蘭

印のチャルダ總督は、ジャワ抗戰僅々九日にして、逸早く全面的無條件降服をなした如き、而して又、比島全米國軍の司令官たるウエンライト將軍が、我が決死隊に踏み込まれて、コレヒドール要塞に於て忽ち白旗を掲げたる如き、要するに、彼等は水道を斷られたとか、糧食が缺乏したとか、援兵が來なかつたとか、適當な口實さへ備はれば、待つて居ましたとばかり、降服の白旗を掲げるのであつて、白旗とは、どうしても縁が切れないのである。

この白旗に就て、直ちに聯想されるのは、彼の日本海大海戰に於ける露國のロゼストウエンスキー司令長官の末路であるが、その旗艦スワーロフが、我が艦隊の猛攻によつて大破損を被るや、ロゼスト長官は、直ちに驅逐艦ブイヌイを旗艦に招致して、それに移乗し、戰場を後にし部下を見棄て、自分だけ、浦潮指して通走を急いだのも笑止千萬であるが、その旗艦から驅逐艦ブイヌイへ移乗の際に、ブイヌイの艦長に向つて

「お前の艦には白旗の用意があるか？」

と、司令長官自身が訊ねた、と云ふに至つては全く驚くの外はないのである。彼等は戦争と云ふと、何より先に、降伏の事を考慮に置く次第であつて、この邊は、全く吾々とその信念を異にして居る。

こゝが即ち、戦の勝敗の分れる所以であつて、世界に比類なき我が國體の有難さが、今更のやうに、轟々と痛感せられるのである。

白人濠洲の昨今

濠洲シドニーについて、尙、話がある。

それは明治三十九年、島村速雄少將(後の大將男爵)が練習艦隊司令官として、シドニーに入港した時のこと、濠洲朝野は擧つて我が艦隊を大歓迎した。

島村司令官も、旗艦橋立の艦上、濠洲朝野の名士を招待して「アット、ホーム」を催された。

その時に、一つの特種があつた。

それは、此の島村司令官の招待状に對して、無禮千萬な用語を以て拒絶して來た返答書であつた。蓋し白人至上觀に己惚れた濠洲の某労働黨の首領株の愚劣なる故意の所業であらう。

「この濠洲は白人濠洲であつて、有色人種の入込むべき處ではない、我々は常に有色人種を排斥しつゝあり、然るに今回、日本の艦隊が、威風堂々と入港し來りたるは、我等の癢に觸るところである。かゝる艦隊を大歓迎するのさへ腹が立つのに、かゝる艦隊より、招待を受けて、食事を共にし、卓下に膝を交へて談笑するなどは、眞つ平御免である」

世にも不禮な、まことに、度し難き暴狀である。が、これは、我艦隊の方で、表て向きにしない中に、流石に、濠洲の官民も大憤慨して、當人に對し、直ちに殿しい制裁を加へて事済みになつたと云ふことである。

由來、濠洲は本尊の英國を笠に無暗に威張つてはをるが、全く實力のない國であり、其の廣袤は七七〇萬平方キロで日本の領土面積の十二倍に及び、而して廣

漠たる地域に生を營む人間の數は、僅に六八〇萬人に達しない。之れは日本の首府東京唯だ一市の人口に相當するに過ぎないのだから驚く。而してこの六八〇萬の濠洲人の内、九割七分が英國系白人で、その包藏する無限の富を、全人類に拒むのが所謂白濠主義なのである。

この濠洲に、日本が加勢などしてやる筋は全くないのであるが、第一次世界大戦の際には日英同盟の關係もあり、大正三年の秋には、我が巡洋戦艦伊吹は、加藤寛治大佐艦長の下に、濠洲及びニュージブランドの陸兵三萬と、馬匹數千を三十八隻の輸送船に搭乗し、それをニュージブランドのウエルリントン港から、獨逸巡洋艦エムデン號の出沒する、危険な印度洋を横斷し、此の間英艦シドニーがココス島に、エムデンを發見して、撃滅すると云ふ中幕もあつたが、此の大きな輸送船團を、十一月初め紅海の入口のアデン迄、八千六百哩の長途を無事護送して、立派に送り届けたと云ふ事實もある。

これには英國及び濠洲、ニュージブランドの國民も非常な感激をし、大感謝を

して、我が軍艦伊吹が、たまく此の船團護送中にエムデン出現の報に接して、これが追撃の爲進發せんとする勇姿の油繪を、荒井陸男畫伯に依頼して描き上げ今尚、濠洲メルボルン美術館に飾つてある程で、これには、衷心から感謝して居り乍ら、さて、移民とか、通商とかになると、彼れ濠洲は直ちに

「白人濠洲！」

を口に出して、我國に楯をつくと云ふ始末であつた。

大東亞戰勃發以來、濠洲は我が日本から、その周邊を壓迫攻撃せられて今や全く大平洋の孤兒となつて、ひたすら米國にすがり、朝夕、哀訴泣號して居る白人濠洲の今日の面目、果して如何と問ひたいのである。

更に最近の米國電報で見ると、九月七日に、米國陸軍卿スチムソンは、近い將來に、黒人部隊を編成すべく計畫中である旨發表したが、實は米國政府が今年末迄に、濠洲に派遣の目的を以て、十七萬五千名の黒人を陸兵に徵用する計畫であるのだと傳へられ、誰れよりも一番驚いたのは濠洲である。

白人濠洲を豪語し、それを主義として居る濠洲が、今更黒人軍隊で防衛されては、白人濠洲の手前と面目が立たず、さりとて實力もなく單に白人濠洲と威張つて見た處で、今日では、自力で防護の見込も立たず、全くのチレンマに陥り、腹の中では黒人軍隊でも何んでも、早く加勢に來てもらうのが、焦眉の願望で意氣地なく喘いで居るのも笑止千萬である。

グリーンイツチと軍艦のペンデント

嘗つて五大陸、七大洋に君臨した大英帝國は、今次大戦を契機として、いよいよ崩壊への過程を踏みつゝあるが、船舶の缺乏、糧食の飢饉、勞働力の枯渴等々は取りも直さず英國の敗亡への吊鐘であつて、日獨伊等樞軸國の強壓に、英國は今はまだその存立の苦悶に喘ぐと云ふ現状である。

ところで、英國が他日、世界地圖から消えるか、或は虫眼鏡で觀る程の小國で存在するとしても、第一グリーンイツチの子午線を基線とする、地球上の經度の如

きはそのまゝでよいのであらうか、又、グリーンイツチを中心としての航海歴（オルマナック）其の他書類や圖表や名稱等も改訂を要するものが山程あると思ふ。

それにつけて、世界の軍艦と云ふ軍艦の橋頭に、日常翻つて居るペンデント（長旗）これは、どんなものであらうか。

元來、此のペンデントと云ふのは、海上のユーモアが、後に有意義な示標となつたものである。

ペンデント即ち軍艦の長旒と云ふのは軍艦旗と同じやうに、軍艦には必ず存在する長くて細い旗で、此のペンデントが實は軍艦の示標であるのだ。

と云ふのは、國によりては、例へば佛國のやうに、軍艦旗が國旗と同一で區別がないのである。そのやうな場合には、このペンデントの有無で、軍艦か商船かを識別するのである。

一般の人は餘り氣付かないと思ふが、凡そ世界中の軍艦と云ふ軍艦の橋頭にはこのペンデントが、何時も長く／＼翻つて居る。

尤も、軍艦に將旗を掲げるやうな場合に限り、ペンデントは使用しない。それは例外なのである。

十七世紀の始め、西班牙に代つて海上に覇を唱へたのが和蘭であつた。當時の和蘭の海軍力は却々優勢であつて、廣く海上を制壓して居つたが、苟も海上に於て和蘭の交通貿易を邪魔する船は、海賊船は勿論、何處の國の船でも、すべて海の上から之を一掃する。

即ち、箒で掃き棄て、しまふと云ふ意味を標示すると云ふので、和蘭の軍艦には、悉く、このマストのてつぺんに箒を結び付けて、海上を横行した、斯様に於て海上に於ける橋頭の箒は、相當に睨みが利いたのである。

すると、當時、新興の勢力物凄く、和蘭の海軍力と競争して立つた英國では、「先方が箒で掃くと云ふのなら、こちらは海賊船でも、邪魔する艦でも用捨なく鞭で、ひつばたいて、海上から驅逐して仕舞う」

と云ふので、橋頭に、鞭を縛りつけて、威張つたものであつた。

海上に於ける、此の鞭と箒との争は相當期間續いたが、結局英國の海軍力が海上を制覇することとなつて、鞭の方の勝利となり、夫れが自然に慣例となつて、いつの間にか、各國でも軍艦には鞭即ち細長い長旗を、橋頭に掲ぐることゝなつた譯で、これが軍艦のペンデントの始まりであるのだ。

右様の経歴であつて、もとゞ長旗は、和蘭と争つて海上を制壓した、英國の仕草にならつて何時の間にか、各國の軍艦が同じやうな長旗を標識として、橋頭に掲げて、軍艦たるの識別として今日に至つたものに過ぎない。

されば、英國が亡びて後は、この長旗は、どうなるであらうか。既に金融界に於ては、ロンドンを中心として總てが確立されて居たものが、それが御時勢で、ニューヨークに移つてしまつたではないか。

正に、世界に於ける、あらゆる維新である。従つて、さう云つた方面も、仔細に觀察すると興味津津たるものがあり、尙、今から考究して置かねばならぬものも多いと考へる。

練習艦比叡の思ひ出

稀有の大颶風に遭遇

私が海軍に身を投じたのは、明治十五年の九月、十三歳の若冠で、東京築地の海軍兵學校豫科に入校したのであつて、當時、御在學中の東伏見宮依仁親王殿下の御學友のやうな意味で、恐れ多くも御一緒に毎日の修業を致したのであり、後からは又山階宮菊麿王殿下、華頂宮博恭王（今の伏見宮）殿下も御入學になり、全く、われ／＼臣下同様、學校に御寄宿の上、御修業に相成つたのである。

この海軍豫科生徒は、この時に限つて、海軍將校の子弟から募集したものであつて、松村龍雄（後の中將）松岡修三（後の少將）澤野辰次郎（私の實兄）吉島重太郎（後の少將）川村金五郎（後の宮内次官）南里團一（後の少將）川上親幸（後の大佐）平賀徳太郎（後の少將、現帝國大學總長平賀讓造船中將の實兄）加

藤寛治（後の大將）松村純一（後の中將）等總てで二十四名であつた。

明治二十一年に海軍兵學校は築地から廣島縣の江田島に移り、陸上の生徒館はないので、一同は商船の東京丸に、艦内生活を始めたのも一つの思ひ出である。

私等は明治二十四年七月に、此の兵學校を卒業して海軍少尉候補生となり、加藤寛治等同級生六十一名は、直ちに練習艦比叡に乗艦した。

此の比叡は、扶桑、金剛（孰れも第一世）と共に、我國が明治八年始めて英國に注文して建造した鐵骨木皮の軍艦で、その排水量は二千二百八十噸、速力は十三ノットと云ふ小艦ではあるが、當時の我海軍にとつては一大勢力を加へたものであつた。

しかも、その竣工迄、建造監督の衝に當つたのが、誰あらう、當時英國留學中の東郷元帥その人であつて、明治十一年、その工成り、本邦に廻航するに當り、東郷元帥は、これに乗組み、英人廻航員を督して歸朝されたと云ふ、極めて由緒深い軍艦なのである。

扱てこの練習航海の際の比叡艦長は、森又七郎大佐（後の少將）副長は植村永孚少佐（後の中將）航海長は梶川良吉大尉（後の少將）砲術長は山下源太郎大尉（後の大將男爵）水雷長は釜屋忠道大尉（後の中將）第一分隊長は坂本俊篤大尉（後の中將男爵）第二分隊長は松居詮太郎大尉（後の大佐）第三分隊長は江頭安太郎少尉（後の中將）で、又士官次室の少尉組には、千坂智次郎少尉（後の中將）釜屋六郎少尉（後の中將）廣瀬武夫少尉（後の中佐、軍神）等が居り、いづれも海軍部内錚々たる粒撰りの將校揃ひであり、その艦内での、我々に對する日常の指導監督も、到れり盡せりであつて、練習候補生にとつては無上の幸福であつた。

この航海は、明治二十四年九月二十日に品川沖を出發して、西班牙領グアム（今の我占領地）獨逸領ニューブリターン、濠洲ブリスベン、シドニー・メルボルン、佛領ニューカレドニア、獨逸領ニューギニヤ、西班牙領フィツピンのスル―島、マニラ及び英領香港を経て、翌二十五年四月十日に品川沖に歸着したのであつて、航程實に一萬三千三百海里、恰も現下の大東亞戰下の關係地域に涉つて

概要な、戰略地點に接觸しての巡航であつた、今日からみれば、その間、自ら感慨禁じ難いものがあるのである。

さて出港後、僅かに十三日目、早くも大平洋名物の鬼門である、颶風に襲はれたのである。

十月二日には大氣頗る鬱して煩悶を覺え、薄氣味惡き無風の後、晴雨計は漸く下つて風となつて來たが、三日の夜に至つて天候は遽かに險惡となり、風波は次第々々に募り、滿天赤褐色を呈し、雲行も轉た荒涼、海上千里を翔破すると云ふ流石の水禽も飛びつかれて、艦を慕つて去らず、たやすく二羽を手獲りにした様な次第で、以て風濤の荒れ抜く光景を卜するに足らんかである。

夜半前、總員起つて荒天準備を爲し、總帆は絞つたが、之を疊ひ譯には行かない。四日午前一時過、やつと蒸汽が出來て機關の運轉を始め、艦の操縦も較や意に任すに至つたが、風波は猛雨を伴つて、いよ／＼強烈を極め、遂に大暴風雨となつた。

艦體は大山のやうな怒濤に翻弄されて、まるで秋風に舞ふ枯葉の如く、艦の揺り上げられる其の時は浪頭から、いきなり宙に擲け上げられたかと疑はれて生きた心地もなく、揺り下げられた時は一氣に浪の底迄落ち込みて、其儘奈落の底に陥るのではないかと危ぶまれる程で、それに機關は空廻りして其都度破壊したかのやうな大音響に驚かされる。その物凄さは眞に譬ふるにもなし！であつた。

夜は明けても四面濛晦、艦は益々滾轉春動、全く水煙の裡に包まれて風濤任せに漂ふと云ふ有様、とに角、天明を待つて、屈強血氣の水兵が身を挺して高橋に攀ち登り、流石は鍛へた鐵の腕前勇ましく、此の暴風雨の中に展帆を收めんと必死の奮闘、廣瀬少尉（後の中佐、軍神）も勇を鼓して自ら登橋、叱咤督勵する所あつたが、帆は翩翩と煽つて容易に手がつけられず、僅かに一部を疊み得たのみで、大半は、ばた／＼と吹流しのやうに、空に舞ひ上るかと思れば、凄まじい音響を立て、次から次へと猛風に千切れ飛ぶのであり、その帆の附根の金物と鐵の帆檣とヤードと綱具とが相混じり、相打つて、鏘爾聲をなし、閃然光を發する物

凄さ凄絶とも何とも喩へやうがない。

その中に舷側のスキギングブーム（碇泊中ポートを繋ぐ木桿）は兩断して波に奪はれ、艦首のボースブリット（三角帆を展ずる基桿）は折斷し、ポート三隻相次で激浪に吞まれ、右舷砲門上扉と、舷側の吊床框は打破られて、海水は容捨なく甲板に打ち込む。

いよ／＼これが音にきく眞正の颶風であつた。

船體の動搖驚く勿れ傾斜實に七十四度に及ぶ。これは動搖計の最大限の指標であつて、實際は、その限度を越えて居つたかも知れぬと云ふ物凄さである。

七十四度の傾斜と云ふと一寸嘘のやうだ、がその時の波は非常に大きく、その波の山の一部分に艦が乗つて居り、その波の山からたゞり落ちて、又、次の波の山に押し上げられると云ふ具合、たゞり落ち、たゞり上り、波から波を渡つて行くのでそれ程、傾いては又、反對舷からの波で起き上り、傾いては起き上つて行つたのである。

艦が、ひつくり返る様な傾斜だから、とても歩く事等は出来ず、艦内、甲板は縦横に綱を張り廻し、將兵は、その綱を生命として、あちこちと、水浸しになり泳ぐやうに甲板に働くのである。

無論、飯など炊ける譯がなく、木つ葉のやうな乾パン（ハードビスケット）の海水に濡れた奴を、てんでに頬張つて、僅かに腹をこしらへると云ふ有様。

その中に夕刻の六時頃であつたか、艦の操縦に最も大切な舵取機の舵索が切斷してしまつた。之は大變と云ふので、直ちに豫備舵索を取着けて舵を運轉して居ると、これは何事ぞ、その豫備舵索が亦破損した。

これこそ一艦の運命に關する一大事で、一同駭然として胸を打つものがあつたが、そこは矢張り船乗りであり軍人である。卽座に用意のラフテークル（ものを引つ張る滑車と索）を持出して忽ち、應急處置を完成したが、その左右兩舷のラフテークルの綱を下甲板の兩側に分れて、艦體大動搖に足を踏み締め、胸迄水に浸り乍ら、面舵、取舵の號令に従つて、エイヤ、エイヤと引つ張つて舵を操り艦

の進路を保つのである。

兵員は防水や水の掻出しの綱や、大砲の固定や動搖物件の緊縛其他に忙しく手が不足なので、このテークルの片方に、吾々候補生が代り合つて就くのである。

夜も無論、寢ずにエイヤ／＼を繰返すのであつて、その苦心辛勞は到底筆紙に盡されるものではないが、此の危急存亡の際に於ける舉艦一致協力は立派なもので、殆んど命を待たずして、それからそれと仕事や處置を運んで行く、その美しき見事なる光景には本當に、感激したのであつた。

四日の夜になつても、風波は愈々猛威を逞しうして、一向に減退の様なく、降雨は殊に甚だしく電光閃々として物凄さ限りなし、一同は運を天に任せて、たと最善の努力を傾倒し、これと戦つて居たのであつたが、ふと、下甲板の艦長室から出て来て上甲板に上られやうとする森艦長の姿を見ると、雨合羽の下に金筋の大佐の通常禮服を着て居られるではないか。

あゝ！我が比叡の運命も、いよ／＼、こゝに極まつたのか、さてこそ艦長は

いまわの際の覺悟として、死装束の禮服を一着に及ばれたのかなど、その下甲板に働いて居た、われ／＼舵の索引きの連中は、相互に囁くのであつたが、實の處、吾々候補生は生れて始めて遠洋航海に乗り出したばかりで、今現に戦ひつゝあるこの大暴風雨も、別に艦の運命に關する程の遭難とは思つて居らず、軍艦は絶対に沈まぬものと、きめて居るので、知らぬが佛の一同は、寧ろ平氣で働いて居たのであつた。

しかし、海上に經驗のある古強者の將兵達は、反つて、此の未曾有の颶風に艦が或ひは轉覆しはせぬかと、一方ならぬ心配を重ねたと云ふ事であつた。

處で、問題の、この艦長の禮装は、實は普段の軍服が、どれもこれも潮に濡れてしまつたので、やむを得ず禮服迄引き出して着用に及んだと云ふ譯であつて、聞いて見れば、

「何だ、馬鹿／＼しよ」

とでも云ひたい一つの喜劇であつた。五日の正午に到つて、やつと常形の天候

に復したので、新舵索を通じ艦内始めて嚴戒を解いたのである。颶風圈に入つてから、これを脱する迄、實に二十四時間、雨濤と闘ふことなんと四十餘時間、その風威の強烈であつたことは、日本海軍始まつて以來の最大レコードの由で、二十有餘年海軍で鍛へた老兵も、この強風怒濤には全く驚いたと云ふ。比叡には便乗者が五人程居つたが、此の大暴しの最中に、時々上甲板に其顔を曝されたのは流石に三宅雄二郎（雪嶺）君一人であつた。

四時會と呼ぶ蘇生會

この大風から逃れた後の比叡は、汽走で、靜々と南下し、今日砂糖栽培等で、
 ① 馴染みのサイパン島、テニャン島を遙か東方に眺めつゝ進んで、八日朝、當時西班牙領であつたグアム島のアブラムに入港し十日程在泊して、暴風で破損した箇所を艦員の手で、それ／＼修繕を行ひ、爾後の航海に支障なきやう復舊致したのである。

さて艦の破損の箇所は、一應復舊したが、艦内の糧食庫には浸水甚だしく、食糧物資は罐詰の外、大部分は痛みつけられた。

生野菜は、さて置き、永く保存出来る筈の馬鈴薯や玉葱や、わかめ迄も滅茶苦茶で跡方もない、常食の米とハードビスケットは海水に濡れて、一杯の虫が湧き最初の中は、飯の中から虫の幾分を箸で取り除けて食べたが、後には虫などは構つて居られず、何もかも一緒に掻つ込むと云ふ始末、ハードビスケットに至つては、面倒だから始めから虫諸共に食つてしまふと云ふ有様であつた。

それに大時化の後には艦内到着處に無数の油虫がわき、賄所は其の巢窟で、大鍋の蓋を開けると、鍋の湯気で天井の油虫が鍋の中に落ちる、その鍋の味噌汁は實は味噌の入つて居ない油虫汁であつたが、三度に一度は眼を瞑つて食べなければならなかつた。

更に困つたのは飲料水であつた。その時分の艦にはろくな蒸溜機の備付はなく水罐にも大分の海水が混じて居り、水の上に居つて水の大缺乏、と云ふ大皮肉、

毎日の飲料は三度の食事の際、めい／＼の小さい茶飲茶碗に一杯づつで、洗面にも、やつと口を洗ぐに足らぬ茶飲茶碗一杯の水だけ、後は何でもかんでも、水は鹽辛い海水で間に合せると云ふ嚴重な制令が布かれ、雨降り天の水を競争のやうにして、盥や洗面器に溜めるのが關の山、それでも大した病人の出なかつたのは、よく／＼我々が野育ちの頑健揃ひであつたからだと思ふ。

されば、艦が濠洲のブリスベンやシドニー・メルボルンなどの港に入つて上陸を許されると、練習候補生は申合せたやうに、眞つ先に、その土地の第一流のホテルに飛込み、食堂のメニューを始めから終り迄、強行軍で押通すやら、チースを菓子と思つて、こてこてと皿にとると云ふ豪傑振りを發揮したが、ウエーター等も嫌な顔を見せず、ホテルでは反つて英語の解かる子供士官と云つて、何處でも歡待するのであつた。

この練習航海中の未曾有の颶風遭難記念として、われ／＼比叻艦長始め乗組の少尉候補生以上は、毎年十月四日をトして今も尙、『四時會』と號する蘇生會を

催ほし、當時を追憶して、生死を共にした草々の語り合に、思ひ出多き比叡を忘れないのである。

因に、四時會と云ふのは、この十月四日午後四時が、颶風の中心のどん底であつて、晴雨計は、この時二九吋二〇（七三六ミリ六）を最低として、漸次上昇を始め、一同愁眉を開いたところから命名したもので、いつも午後四時を期して開會するのを例としてゐる。而して今年の第五十一回目の催ほしには、會する者僅かに八名、幾分寂莫の感なきにしもあらずであつた。

帆走中の壯觀鑿釣

この比叡は、元來、三本橋マストの帆前を主とする所謂鑿艦で（古い海軍での俗稱）港に出入の際には、鐘を焚いて、汽走するのであるが、外洋航海には主として帆走である。

今日から見れば、軍艦が帆かけて走る等は、如何にも悠長で、戦艦と云ふ觀

念からすれば、大よそ時代遅れの丁髯姿で、全く似つかないのであるが、これは一つには、この帆前の操作によつて、海上の船乗魂を鍛へ、敏捷なる動作を練る上に絶好の道場であり、一つには航海に要する運轉經費の節約ともなるのであつて、國によつては、今日でも海軍士官養成の爲に、練習艦として帆前船を新造する向もある位で、なか／＼捨てたものではないのである。

とにかく帆走は汽走と違ひ、第一煙突の塵芥はなく清潔で、常に、ごと／＼といやにこたへる機關の響はなく、海波穏かな晴天に、總帆を展じ、頃合の風を含んでゆらり、ゆらりと走る時など、これ程愉快なものはないのである。

もつとも、熱帯地方で、無風の時など、總帆はだらりと垂れて、波のまに／＼艦體のみぐら／＼とゆれて、一向に航程は進まない。暑さは暑し、驟雨でも来ないと、全くやる瀬がない。このやうな時には、忽ち鑿釣りが始まる。

鑿釣りは手頃の角板の上に、何斤かの罐詰肉と艦内の鍛冶屋で作つた、拇指大の丸さの鋼鐵製の太釣を縛りつけ、これに三尺程の、鐵の鎖を付した一時綱を繫

ぎ、これを艦の艦から海上に流して置くと、艦尾に群つて來る大鱈は、一口に此の角板ごと呑んで終ふ。

艦の番兵が合圖すると、艦内の當直に當つて居る水兵數十名は忽ち、此の綱を引つ張つて鱈を甲板に吊り上げる、大きいのは一間以上二間にも及ぶ。

さあ、これからが大變である。幾人かの腕自慢の血氣の水兵は、禪一ツの眞裸體で、片手に海軍ナイフを持ち、甲板で暴れ狂ふ鱈の廻りを取り圍み、我こそはと身構へして、隙を窺つて居る。

やがて、隙を見て、その中の誰か、

「えいつ！」

とばかり、飛び込んで、鱈の胴體に組みつき、逸早く、尻尾の付根に斬りつけのである。さうすると、流石の鱈も尾が振れないので、抵抗力が弱る。そこをつけ込んで鱈に止めを刺すと云ふ譯だが、之れは頗る壯觀で、彼の闘牛の角を避けて劍を振ふよりも、きわどい處がある。

よほど、敏捷しこく、機敏にやらないと、鱈の強烈なる尻尾で、はたかれて大怪我をするのである。要するに、荒波に揺れる艦の高い帆檣の上に登り、風で膨らんだ帆の上端を、手放して、駆け渡つて仕事するといふやうな藝當を、平氣でやつてのける百練の海の勇者でなければ、一寸眞似の出來ない仕業である。

さて、その鱈は、糧食の殊に缺乏してゐる折柄何よりの御馳走で、艦内の皆が酔味憎か何かで、舌鼓を打つのである。

この鱈には時々景物が付て一所に上がつて來る、之れはパイロット、フキツシユ（水先案内魚の意）と稱し、僅か五六寸の小魚で、鱈を餌のある方に導き誘ふのだと云はれてゐるが、其形頗る奇異で腹背殆んど辨じ難く頭部は平扁で、恰も草鞋でも頭に戴いたと云ふ恰好だが、之れで蛸の足の様に吸着質を有し、常に鱈の顎の邊に、頭で吸ひ着いてゐて、居ながらにして鱈の食べる餌の御餘りを食べて居る、寄生魚なのである。夫れで鱈が吊り上げられて、甲板で伸びてしまつても、いつ迄もその頭で鱈の腮に吸付て居るのが面白い。

見取圖と天測

さて、比叡はグアム島から獨逸領ニューブリタイン島のプリスチス島(マツビ)を経て、濠洲に進み、十二月九日の朝、シドニーに入港した。

このシドニーに入港の際に一寸した一奇談がある。

比叡はプリスベン出港以來、濠洲の東海岸づたひに南下した。そして十二月八日に、明朝は正に眼差すシドニーに達するところ迄やつて來た。練習候補生の連中は、早くも夕飯を済ませて上甲板に出て、雑談に耽つて居ると、艦の行く手に當つて突然と山と岬が現はれた。

之は變だ、もうシドニーに來たのか知ら、夫れにしては早や過ぎる、一つ山と岬の形を見取り圖に照して確かめて見ようと云ふので、明治十九年に練習航海をされた秀島候補生(後の秀島成忠少將)の航海日誌を、吾々仲間の佐野常羽候補生(後の少將伯爵)が借りて來てゐるので、その日誌にある濠洲東岸の見取圖を

調べて見ると、今、現に眼の前に見える山と岬は、どうもシドニーの入口ではなかつて、シドニーを通り越して、それよりも遙か八〇哩も更に南方にあるポートジャーパービスの岬に似て居るので、愈々以て判らなくなつて來た。

艦長も航海長も之には驚いたが、まさかポートジャーパービス迄來る筈はない。兎も角も、天測をやらうと云はれたので、折から日没も過ぎて天漸く暗く、南半球の空には一面星が輝いてをるのを幸ひ、吾々候補生は何と云ふ星であつたか、銘々一つの星を捕へて、その高度を測り、大急ぎで、計算をして艦の位置を出して見ると、誰の答も皆一樣で、それは正にポートジャーパービスの沖合であつた。

これは大變、此儘行くと岩に乗り上げると云ふので、遽かに艦首を逆轉して北上、一晚中もと來た路を走つてその翌朝、やつと目指すシドニーの港口に達し、無事入港、何喰はぬ顔で在泊の英國艦隊と、儀禮の交換などをやつたのである。

さて此の比叡は何が故に、かくも大なる過誤を致したかと云ふに、それには、なかく面白い話がある。

今度の比叡の巡航々路は、東京灣出發以來、グアム島、ニューブリタイン島、濠洲東岸と殆んど眞南に向つて下つて來たのであり、地球の南北線上に眞つ直ぐに艦の首尾線を置いて、毎日毎夜、波のまに／＼艦首艦尾を上げたり下げたりして、數十日を経過する中に、いつの間にか艦の鐵骨や帆檣や大砲が、磁石になつてしまつたのである。

艦の航海に最も大切な羅針盤が、その爲に尠ならず歪ゆがみを生じたのであるが、それは誰も氣が付かなかつた。さうして、ブリスベンから、シドニーに向つての航海には候補生の稽古の爲、わざと天測によらず、この狂つた羅針儀で、山の方位を測り、艦の位置を定めて航海して居つたのであるから、艦の位置は實際とは大變相違して居り、それに南流の潮流も手傳つて、何時の間にかシドニーの前を通り越して、八十哩も先のポート・ジャークビス沖迄進んでしまつたやうな譯で、練習候補生の連中が何の氣なしに、見取圖と對照して、ポート・ジャークビス岬を發見した計りに、危機一發の處で難船を助け、命拾ひを致したのであつた。

惟ふに、シドニー沖の比叡は全く、嘗つての見取圖のお蔭で、その危機に瀕した遭難を一步手前に救はれた譯であつて、海上に見る島の形や山の模様などの見取圖が、航海者にとつて如何に必要なものであるかを、事實によつて物語るものであると共に、天測、即ち天體の高度を計つて、艦船の位置を定めると云ふやうな方程、正確なものはないと云ふ事が、實證せられた次第である。

而してこの見取圖や、天測の善用によつて、現に大東亞戦争の海上大作戦に於ても、その遠距離行動や攻撃實施が常に見事に、正確に實現せられつゝあるのであり、而して所用の時期に、所用の兵力を、所用の地點に集中すると云ふ、戰略上、最も大切な必勝要諦も之等のお手傳によつて、何等手違ひなく、すらくと運ばれて居るのである。

黄海々戦に於ける比叡の奮戦

比叡が、此の練習航海から、東京灣に歸着したのは、明治二十五年春であつた

が、それから僅々二年半後の、明治二十七年九月十七日には、松島、嚴島等々の主力艦と共に、堂々たる本隊の一つに加はつて、日清戦役の黄海々戦に、いとも華々しい大活劇を演じて、敵味方の衆目を驚かしたのである。

黄海の海戦は、何と云つても、敵は、その偉大なる甲鐵艦と、多數の巨砲とを誇りとする精銳の無敵艦隊であり、司令長官は、世に其名を謳はれた丁汝昌提督で、始めから一平八平の決戦を企圖したものと見え、全艦隊を横陣の様な後翼梯陣に備へ、勇敢にも轟地、我艦隊の中央を目掛けて殺到し來つたのであつて、その意氣込と行動とは大いに稱すべきであつた。

之に對し、我艦隊は、旗艦吉野、高千穂、秋津洲、浪速、の四艦を前衛隊として坪井航三司令官(後の中將男爵)之を率ゐ、これに續いて伊東祐亨司令長官(後の元帥伯爵)直率の本隊は、旗艦松島を先頭とし、千代田、嚴島(私の乗艦)橋立、比叡、扶桑と云ふ順序に各隊單縱陣を形成し、樺山軍令部長(後の大將伯爵)の座乗せる假裝巡洋艦西京丸と、砲艦赤城を非敵側後方に隨伴し、敵陣の右翼を

掩撃するやうな對勢を以て、敵に迫つたのである。

本隊の第五番艦である比叡は何と云つても此艦隊の中で、前に述べる様な貧弱な管艦であり、殊に速力が遅いので、合戦が始まつてから、兎角後れ勝で、前線艦橋立との間隔が段々開いて一千三百米にも及んだのである。

機乗ずべしと云ふので、此の間隙を目指して丁汝昌は、恰もリツサ海戦の奥太利テゲトフ司令官が、伊太利のベルサノ司令長官の艦隊を、中斷突破した様に楔をさして迫撃し來たのである。

敵の巨艦が鼻を整へて、突掛けて來る猛然たる勢には比叡は、絶對絶命避ける事もどうすることも出來ない。あわや突き沈められたかと思えた其刹那に、櫻井比叡艦長は突差に面舵一杯を命じ、目の前に迫つた敵の旗艦定遠とその隣艦の來遠との間に、いきなり艦首を突つ込んで、敵陣の眞唯中に乗り入つたのである。

これには流石の敵艦隊も呆氣に取られ、うっかりすると同志打ちをやるので互に發砲は出來ず、敵陣形は忽ち混亂を始めた。

何にせよ、舷々相摩しての彼我の擦違ひは、御互ひ飛移れる程近いので、來遠は直ちに甲板上に襲撃隊呼集をやつて比叡乗つ取りに掛つた。

此の襲撃隊と云ふのは、敵艦に衝突若くは觸接した場合に敵艦に斬込み、或は敵の我が艦内に襲來するのを防禦する爲、前後甲板その他小高い所に、鉞や槍や銃劍を持つた兵士を呼集するのであつて、その當時は何れの海軍でも、この襲撃隊は準備して居つたのであつて、今日艦隊でやつてをる、航空機防禦の爲の銃士呼集のやうなものである。

所が、これを見た比叡は檣樓の一時ノルデン機關砲を以て、來遠の甲板に並んでゐる襲撃隊を、百米か二百米の近距離で片つ端から殆んど一兵も餘さず、本當の掃射をしてしまつたと云ふ、眞に呼吸をもつけない活劇を演じたものである。

尙、比叡には豫て接戦の準備として兩舷のスウインキング・ブーム（軍艦の兩舷に一本宛取着けてあつて碇泊中は外方に張り出して汽艇や端舟を繫留する桿）の端に十六听四分の一の爆薬罐を縛着し、その發火線を艦橋上に導き、其處から

發火出来るやうにし、敵艦と衝突若くは觸接の場合に綱を引つ張つて、そのスウインキングブームを外に張出し、爆薬罐を敵の舷側の水面下に突き込み、ドーンと發火して敵の艦腹に大穴を開ける手筈になつて居つたのである。

これを以ても、この海戦に於ける、我艦隊將兵の意氣込が、如何に壯烈であつたかを窺ふに足るのであり、我が國民の斯様な傳統的精神が、自ら、この海戦に大勝利を招來した所以なりとも云へるのである。

もつとも、この桿の先に爆薬を裝備して、敵艦の横つ腹を爆破する計畫は實施に至らず、敵列を通り抜けて了つたのであるが、その通り抜け様とする途端に後方から定遠か鎮遠かの三十種砲彈の命中を被り、比叡は遂に火災を起して少からぬ死傷を生じた。

尙、火災の爲に危険の虞ありといふので、注水した火薬庫もあり、種々の關係で比叡は一時戦闘力を失つた形になり、終に其處から列を離れて、大同江の假根據地向つたのである、之れが我が比叡の武勇譚である。

さて、比叡の直後に續いたのは殿艦の扶桑で、これは比叡よりも更に遅れて居り、敵艦の殺到に對しては一層危なかつたのであるが、扶桑艦長の新井有貫大佐は、當時の我が海軍に在つて艦の操縦にかけての第一人者と謳はれ、後に仁川沖の露艦ワリヤーグ、即ち宗谷を引揚げた知名の將軍で、とも角も、扶桑は其場を切抜けて、巧みに本隊に復歸して來た。

如何にして、あの難場を切抜け來つたかに就ては、當時色々話があつたが、一つは扶桑の艦部の外舷に、魚雷發射管の繪を描いてあつた。そのお蔭であつたらうと云ふやうな冗談半分の噂も立つた。

元來、新井さんと云ふ人は奇抜な事をする方で、扶桑には元來魚雷發射管は艦首兩舷に一門づゝあるのみで、殿艦の艦が餘り淋しいとでも思つたのか、艦の艦の方の外舷兩側に水上發射管の繪を描き、魚雷が其處からニユウと頭を出してゐる所を塗具で描いて置いた。

とにかく、その當時の魚雷でも、少くとも四百米位は行くと記憶するから、こ

れでは敵の方でもウツカリその艦に近付くと危いと云ふので、定遠鎮遠なども扶桑を敬遠したのだらうと云つて、若い士官の集る士官次室邊では、専ら、そんな噂をしたものである。

洵に笑止な話だが、繪を描いて敵を欺くのは、まだ罪の無い方であつて、支那の平遠と云ふ巡洋艦は、後に日本で捕獲して内部を調べて判つたのであるが、艦首の發射管は外から觀ては、如何にも實物の通り、立派な發射管の形をしてゐるが、中味は全く發射管がなくて空であつた。

即ち艦装の時に、平遠の士官が何時の間にかその費用を食つてしまつて、實際には發射管は一つもなかつたのである。我々は、さうとは知らず、此の海戦には大いに警戒をして、左舷側に近く平遠を迎へて接戦をやつた時など、彼奴は艦首に魚雷を持つて居るからと云つて、少なからず用心して、何かと心を悩ましたものである、この邊が實際支那人と日本人との、戦争に對する國家觀念の異なる處なのである。

日本の昨日と明日

日清戦役の三國干渉と帝國

日清戦争の局面も漸次進んで、旅順も開城し、威海衛も陥落し、北洋艦隊も全滅して營口も我手に入った時、作戰の順序として、先づ、澎湖島攻略の行動が起されたのであり、伊東祐亨司令長官（故元帥伯爵）の率ゐる我が艦隊は、渤海灣方面の作戰を井上良馨西海艦隊司令長官（故元帥子爵）に申繼いで、明治二十八年の三月、佐世保出發澎湖島に向つたのであつた。

此の主力艦隊の、先鋒の戦隊司令官は、東郷平八郎少將（故元帥侯爵）であつて、その旗艦吉野が坐礁し澎湖島沖で、遽に浪速に乗移られるなどの事故もあつたが艦隊は豫期の如く、二十三日には澎湖島攻撃の火蓋を切り、上陸部隊の比志島枝隊は二十四日には、一氣に澎湖島の馬公城迄占領してしまつた。

この陸軍の比志島枝隊の砲兵隊が貧弱なので、艦隊から海軍速射砲隊として松島、嚴島、橋立の三艦から、四十七耗速射砲各一門より成る砲隊を編成し、之を比志島枝隊に参加し澎湖島攻略に従事せしめたのである。

海軍速射砲隊は馬公城占領の翌日、即ち廿五日には馬公南端の金龜頭砲臺の備砲を修理しその十二吋砲、十吋砲及び七吋砲を使用して、對ひ側の漁翁島砲臺を砲撃したが、前日まで盛んに發砲してをつた敵は、この日は殆んど應戦せず、反つて火藥庫の爆發らしき黒煙を認めた。

そこで翌廿六日海軍速射砲隊四十名は頗る冒險であつたが、馬公から三隻のヂヤンクに分乗して漁翁島に押渡り、之を占領してしまつた。當時私は少尉で嚴島から海軍速射砲隊を率ゐて之に参加し、具に陸の戦闘を味ふことの出來たのは大いに幸運であつた。

此の澎湖島占領の三月二十四日が内地に在つては、馬關に於て、支那の李鴻章と我國の伊藤博文伯とが、春帆樓で、媾和談判を開始した第一日目であつた。

其後我が艦隊は澎湖島附近の清掃に従事して居たが、四月十七日になつて、馬關では李鴻章の狙撃負傷事件などの波瀾もあつたが、媾和の談判は纏まつて、愈よ成立を見るに至つたのである。

そして、清國は、遼東半島と臺灣並に澎湖島を我國に讓渡し、償金二億テールを納れ、新に五市を開く事等を約した。

越えて僅かに五日目の二十一日に、露國、獨逸、佛國の三國は、我國に對し、日本が遼東半島を領有するは東洋平和に害あり之を放棄せよと勸告して來た、これが例の有名な三國干涉である。無論武力干涉であつて、この勸告を拒絶すれば直に目にも見せ様と云ふので、露、獨、佛三國の艦隊は夫々戦闘準備を整へて今にも出撃の態勢を誇示して居る、正に山雨到らんとして風堂に滿つるの威容であり鬼面である。

當時、我大總督府は、小松大將宮殿下を奉じて、既に旅順口に進駐して居り、大總督府に於ては、三國干涉に對應する爲め、即時、我が主力艦隊の招致を發令

した。

が、その當時は無電もなく、有線電信は、電線が敵地を通つてゐるから使へない。そこで九五〇噸の新造砲艦『龍田』を派遣することになり龍田は、二十四日夜、旅順を發し、澎湖島へ急行したのであつた。

龍田は、大速力で一千湮三日四晩で突破して、二十八日の未明に馬公に着くと我が艦隊は居らない、我が主力艦隊は厦門の方へ巡航して居たので、直に西京丸を急派して、大總督府の命を傳達したのであつた、當時の通信連絡のノロさ加減は今考へても齒がゆへ位である。

そこで伊東司令長官は、一旦馬公に歸り、夫れ／＼必要の所置を濟ませた上、翌三十日に艦隊を率ゐて馬公を發し、佐世保に急行した。尤も急行と云つても今とは違つて、速力も知れたもので、五月五日の未明に到つて、漸く佐世保の軍港に入つたのである、三國干涉の當日から數へて十四日目何事もスローモーション時代である。

ところが、その前日である五月四日には、我が政府は、涙を吞んで、三國の干渉に屈従し、遼東半島還附を決定してしまつたのであつた。噫！ 萬事休すでも致し方がない。

いづくぞ知らん！ この三國干渉に泣寝入りの我が日本を尻目に掛けて、翌年の明治二十九年九月には、遼東半島還附を強調した當の露國が、清國より滿洲鐵道敷設權を獲得して、東清鐵道株式會社を設立し、更に其の翌、明治三十年十一月には、獨逸が、自國の宣教師を殺害されたのを、口實にして、まんまと青島を占領し、續いて之を租借すると、時を移さず、露國は其艦隊を以て、旅順、大連を占領し、強奪的に、これを清國より租借してしまつたのである。

さうなると、英國は無論黙つてをる筈もなく、勢力均衡上を云々して、威海衛を租借するし、佛國は、海南島の對岸である廣州灣を租借すると云つた鹽梅に、露獨、佛、英の四大強國に關する限りは、勝手に鼻をつけて口を拭つて納まつたのであるが、思へば、隨分勝手至極、その横暴さには、全く驚くの外はないのである。

ある。

この三國干渉には、明治天皇は長くも深く宸襟を惱ませ給ひ、有名な三太詔勅を御出し遊ばされて、一應は事は納まつたのであるが、畏れ多くも、悶々の御心情は拜察するに餘りある處で、當時、次の如き御製を遊ばされたのであつた。

御製

とる棹の 心なかくも漕ぎよせよ

葦まの小舟 さわりありとも

かくして、ひそかに思ひをやり給ふたのは恐懼の極みであつた。

さればこそ、當時の國民は、叡慮を拜察し、萬斛の涙を吞んで、その遺恨骨髓に徹し、爾來十年、一劍を磨いての臥薪嘗膽、朝から晩迄、汗水垂らして働いた大の男が、當然口にすべき、その三度の食事さへ二度に我慢し、さては、女の生命とも云ふべき髮結錢や紅白粉の資に至る迄、之を節約して勤儉、緊縮の生活に甘んじ乍ら、一方に於ては、實に精銳無比の大陸軍と、粒の揃つた最新式の大艦

隊を充實整備したのである。

まことに、良薬は口に苦しと云ふ。この三國干渉は日本に取つて大の薬となつた。そして、充實された軍備は、やがて來つた日露の大戦に於て、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍と、盡忠の赤誠と共に、遺憾なく其の偉力を發揮して、あの様な大勝利を得たのである。

更に、その大勝利が土臺となつて、今や我國は米英重慶を相手として、歴史的
大聖戦の目的完遂の爲、絶大の戦果を擧げつつ、大東亞戦争を戦ひつゝあるの
である。

日本に刃向ふ國は皆亡ぶ

由來、米英兩國は、その金力と物資の大を恃んで世界を横行濶歩し、之に反抗
せんとする者は威壓と謀略を以て一蹴し戦はずして之を屈服するのが、その常道
とする所であつて、或は世界平和と人道を振りかざして、軍縮會議を巧らみ、華

府條約倫敦協定等で、我が日本の勃興を抑壓するのみならず、精神的にも之を癩
痺衰滅せしめんと、策謀之れ努めておつたのである。

頭山滿翁も、日本は固有の傳統精神を有し、立國の基礎を道義に置き、忠孝の
觀念に徹底して居る、この忠孝は即ち日本に取つては例へば、二本の牛の角であ
る、此の角あるが故に米英等の外敵は日本に對して齒が立たぬ、そこでどうかし
てこの二本の牛の角を抜き取つて、その後で日本を易々と料理したいと云ふのが
彼等の狙ひであり計畫であつて、日本に對し盛んに精神的の内部切りくづしを試
みると同時に軍備制限をやつたり、最近には經濟壓迫から進んで包圍的經濟封鎖
迄斷行すると云ふ様に、餘りにも、日本を見くびつた無禮の態度を示し來つたの
で、そこは日本人には骨がある、忽ち立つて彼等の面上にグアンと鐵拳を喰はし
たのである。

斯くて日本は從來永い間、世界を我物顔に牛耳つて居た物質萬能、我利我慾、
自己中心の米英等を撃滅し、全世界を萬民和親の樂土となす、之れが日本民族の

天業であり、大使命である、平たく言へば忠孝の角で先方を、やつつけてしまふと云ふ事になる。この大東亞戦で、米英は愈よ滅びる時が来た、日本は神國である、日本に双向ふものは皆亡ぶのだ。

と喝破して居られる。

まことに、その通りである事は歴史によつても證明されてをる、古くは元寇の元で日本を侵さんとして二度も來襲して撃攘された。その元朝もいつしか亡び、朝鮮征伐の相手であつた明朝も其後程なく滅亡を見るに至り、近い處で、日清戦役であるが、あの時、日本に双向つた愛親覺羅の清朝は、鼎の輕重を問はれてその後、之が原因をなして遂に亡びてしまつたのである。

更に日露戦役である。流石に強大を誇つた露國のロマノフ朝も、日本に双向つたことによつて、間もなく革命の火の手が揚がり、第一次世界大戦が更に直接の動機をなし、レイニンの擡頭となつて共産黨は全國を風靡し、ニコラス皇帝のロマノフ一家は悲惨にも、エカテリンブルクの露と消えて遂に滅亡してしまつた。

次に、第一次世界大戦である。あの時、獨逸は青島問題を切つ掛けとして日本に双向つたのであるが、大戦の終結と同時にカイゼルはその本國獨逸を棄て、和蘭に亡命し、ホーヘンローゼン朝は忽焉として亡んでしまつたのである。

かくの如く、歴史は洵に瞭かである。今度の大東亞戦に於て、支那の蔣介石や英國のチャーチルや米國のルーズヴェルトが日本に双向つた故に亡びることは、これは極めて自然の原則であると思ふ。

一 觸即發と飯沼飛行士

昭和十二年の春の帝國議會であつたが、時の總理大臣林銑十郎大將は、演壇に立つて、

「今や事態は、いよいよ逼迫しつゝ、一觸即發の危機に直面して居る」

と云つて、頻りに、この一觸即發と云ふ言句を使用せられるので、貴族院の名物男で、ローマ字で名高い田中館愛橘博士が、林首相に向つて、

「首相の繰返へされる、その一觸即發の一觸とは抑も何を指されるのであるか、何を意味するのであるか」

と質問された事もあつた。

後年、私は、田中館博士に、

「あの一觸即發の一觸の意味は諒解されたであらうか」

と訊ねた處、田中館博士は、

「いや、それは今次大東亞戦争になつて、始めて、よく判りました。この一觸と云ふのは、自分の考へでは、昭和十一年から起つたと思ふ、その年に我が國産飛行機神風號が東京からロンドン迄、一萬五千キロを僅かに九十四時間で翔破し世界航空史上、空前のレコードを作つて、全世界を驚倒せしめたばかりでなく、その歸りにも、又、同じ空路を悠々と飛んで、餘裕綽々として、無事歸來した事は、その行爲の大膽さに世界は今一度、眼を瞠つたものであつた。

更に引續いて、我が帝國大學航空研究所に於て作成された長距離、無着陸の新

鋭航研機が、昭和十二年五月航續距離一萬一千六百五十キロ、滯空時間六十二時二十三分、その平均速力一八六、八キロと云ふ、最大航續距離、最高平均速力の二つの世界的レコードを同時に獲得した。

この二つの事實は歐米列強が、始めて科學上の日本の實力を認識した緒となつた次第で、

『日本、後世恐るべし!』

と、今に於て、双葉の中に、勃興する日本を制壓してしまふに非ずんば、後に斧を用ふるの憂あるに到らん事を懼れて、さてこそ米英等が、聯合して、陰に陽に日本を包圍壓迫し、又に凜らずして、日本をやつつけやうと、その制壓手段に出づるに到つた。

つまり、これである、神風號と航研機が、即ち、その一觸であつて、米英等の今日の即發を見るに到つたのである」と、語られた。

成程、理窟は、どうにでもつくもので、航空屋は矢張、何でも航空に世の中の理窟を持つて行かぬと、納まらぬと見える。

が、神風號と云へば、その有名なパイロットであつた、あの若い英雄的な飯沼飛行士は、あたら前途有爲の志を抱き乍ら、南海の空に名譽の戦死を遂げ潔よく人に先んじて散華したのは、如何にも痛惜の限りである。

それにつけても、飯沼飛行士の訪歐の歸途、神風號をラングーンに歓迎した一新聞社長の言に

「われ／＼と同じ東洋民族である日本人が、今度、こんな立派な飛行機を作つて、他の民族が企て、まだ成功しなかつた記録飛行に成功し、今、こゝに我等のラングーン市に着陸したのだ。われ／＼は心から歓迎せずには居られない」とあつたが、そのラングーンには、今日日本軍隊が進駐し、ビルマは將に英國の羈絆を脱して立派に獨立國として立たんとして居ることは、東亞共榮圈の爲に慶祝の至りである。

亡き父を語る

隠れた父の慈愛

私の友人の老將軍が器用で、自分で瓢箪の繪を描いたが、それに、かう云ふ贊がしてあつた。

百年無惜千回醉

一盞能消萬古愁

と云ふのである。それから大阪で、禪坊主の様な生活をして居る、古老から聞いた歌にかう云ふのがある。

樂は後に柱 前に酒

氣の合ふた客 摺鉢の音

由來酒を禮賛した和歌、詩文などには、優美とか勇壯とか云ふ品は窺はれない

が、その持味は萬更捨てたものでもない。

今日大戦に直面して、國民誰も彼もが緊張してあり、最近に發表された、愛國百人一種など拜誦すると、愛國、愛國、報國、殉國、その一つ々に自から涙の滲む次第である、その最中に、べん／＼と酒を説くのも聊か氣がひける様であるが、この話の發端が酒から起つてゐるので暫く御免を蒙りたい。

扱て私は青年時代から酒を嗜んで、古稀を過ぎての今日尙ほ杯を捨てず、忙しい裡にも之を樂んで悠々自適してゐるのだが、思ひ起すと、私が明治三十四年頃大尉で軍令部副官時代のことであつた。

時恰も、三十三年、北清事變の後をうけて、同方面で協同作戰をやつた獨逸のワルデルゼー元帥とか英のシーモア元帥とか（前大戦で有名になつた英のゼリコ元帥は大佐で旗艦の艦長、ピーチー元帥は中佐でどれかの副長であつた）各國陸海の將星等が本國への凱旋の歸途、我が日本に立寄るものが續々と踵を接し、所謂、應接に暇なしと云ふ位、これを陸軍と海軍とで、それぞれ歡待するのであ

つたが、海軍の方の山本權兵衛大臣は、日本式宴會は絶対に嫌ひで、御客を招く晩餐は必ず海軍大臣官邸でやられた。

そこで自然に伊東祐享軍令部長が、これ等の外人客を何時も紅葉館あたりに招待するのを例とせられた。私は、その副官を勤めて居つた關係上、外人の接待などで、随分夜更かしをするし、酒杯を用ゆる機會も多かつた。

私の養父清康は謹嚴そのものと云ふ性格で、頗る几帳面で、酒は全く用ひず、冗談一つ云はぬと云ふ、一寸取付き悪い處もあつたが、少しも蔭日向のない明朝な思ひやりのある親切な老紳士で、晩年は胃腸の持病で常に習慣的に何か服藥して居つたが、それで偶には遊獵などに出掛けることもあり、靜かに餘生を樂しむと云ふ風であつた。

従つて私の大酒を相當氣にして居つたに違ひないが、遂に一言も之に觸れたこともなく、又間接に母などから、それとなく、注意せしむると云ふ様なこともなかつた。

ところが父は、明治四十二年秋、私が海軍大學校教官の中佐時代に逝かれ、それから二十五年を過ぎた昭和十年頃であつたか、在雲州松江市の或人から、親切にも父が明治三十五年三月、麴町在住の醫師多納光儀先生（松江の人）に送られた書簡を送り届けて呉れた。

之を一見して私は、父が口にこそ出さなかつたが、如何に私の飲酒に心を痛めて居つたか、又、如何に私の將來を心配して節酒せしむべく苦心されたか、當時の父の心情を想ひその時分のことを追憶して感激無量、落涙禁ぜんとして禁じ能はざるものがあつた、私は早速、墓參の上、父の靈に衷心から謝恩謝罪の意を表したのである。父の書簡は次の通りである。

謹啓（中略）

清種儀、過日已來少々咳嗽昨今の寒氣一層相増候様見請候に付、先生の御宅へ立寄り御診察を受け服藥可致旨申付置候、若し同人參り候得ば、昨年已來陸上勤務、殊に軍令部副官之任務故、交際上紅葉館等へ度々夜半頃迄飲酒致し候故

酒量は益々上達随分大酒家の數に入り家内共は常に將來を心配致し候、何卒先生より足下の體格呼吸器上向來甚危険なる故、斷然衛生上酒は節す可し然らざれば肺病發生すと恐れしめ被下度、彼の實妹肺病に而死せし故、肺と云へば少しは恐怖有之べく、兎に角海軍士官は常に過酒の爲めに身を損するもの續々有之、今警戒を加へるには先生のおどかし大功有之宜敷願上候
最近新藥の發明殊に我國の人、例へタカジアスターゼの事は熱海にて東洋先生より承り、我々には時々必要の妙藥此散藥用法御教示願度候
又一藥血止め、此藥は資生堂に所持せしや、先生は右二種御試驗ありしや、其血止も我々の如く歳にも恥ぢず銃を擔ひ山野を馳せ廻るものは、時々必要を感じ候に付相求置度候

右御伺旁々且つ御依頼申上候 敬具

三月二十四日

清 康

多納老先生

繰り返しくこの父の書簡を読んで私は泣いたのである。

扱て私は佐賀縣士族海軍大佐澤野種織の三男で明治十七年、十五歳にして林家（今日の安保家）に養嗣子となつたもので其際改名の話があると、養父清康は即座に兩方の親の名を取つたら一番よからうと云はれて、幼名庚三郎を改めて清種と名乗つた。即ち清は養父の首字にて當然であるが、種と云ふ實父の首文字を、清の字の下に其儘の音で附するのは、何となく心苦しい處もあるので、養父は早速媒酌人の近藤眞琴先生に御願して、その読み方を調べて貰ひ、タネとカズとを得た。そこで私はタネの音を避けて、キヨカズと稱し今日に至つたものである。

この機會に父の豫て書留め置かれた犬尿録と、日常私に語られた事などを參酌して、少しく父を語ることに致さう。

南洲龍馬に海防を説く

父は天保十三年三月、廣島縣御調郡向島の醫家林金十郎宗清の四男に生れ、始めは謙三と呼び、明治二年清康と改め、明治二十九年、林より安保姓に復したのであつた。

嘉永六年、十二歳にして父母の膝下を去り、京攝地方に留學した後、廣島の儒士河野金藏氏の塾に學んだ。

萬延元年、庚申、齡十九。長崎に於てボムベイ氏に就き蘭書を學び、専心醫術を修む。尋で外國の情況を諒知するに及び大に感ずる所あり、一朝奮發し蘭書を棄て英書を學び海軍術を修め、以て有事の日に當り國恩に報ひんことを期す、然るに蘭學を廢すれば醫家に寄食するの便を缺くを以て、他人の需めに應じ日々五十枚の譯本を筆寫し、其報酬を得て之を學資に充て螢雪太だ努むと云ふ。

文久三年 癸亥 齡二十二

當時尊王攘夷の論天下に喧し。五月十五日を以て攘夷實行の期とし、毛利藩は馬關海峡に於て米英蘭の艦船を砲撃すること五日に及べり、又京師に於ては廟議一變の爲め、頗る騷擾し三條卿以下の七卿長門に走る、海内海外の形勢大に青年志士の肉を躍らしむ、父は長崎に在りて勉學益々努む。

元治元年 甲子 齡二十三

七月蛤門の變あり。

八月五日英佛米蘭の同盟艦隊馬關に至り、城山關見及び前田の砲臺を攻撃破壊し翌六日遂に之を占領す、後毛利藩と外國艦隊との間に和成る。

十一月徳川幕府征長の師を起す、間もなく事一旦結了せしが如きも、天下の人心は却て幕府を離る。

父は長崎に至りて勉學の外餘念なし。

慶應元年 乙丑 齡二十四

父は是より先何禮之助氏の塾に在りしが、此年之を退き瓜生三寅氏兄弟、卷退

藏氏（後の男爵前島密氏）橘恭平氏、高橋顯正氏（後の芳川伯爵）其他五六の學友と長崎なる某寺院に寄宿し日夜寢食を忘れ汲々苦學す。卷氏は此團の先輩なり未だ幾何ならずして島津侯に聘せられ、鹿兒島に至り同所の開成所に於て、生徒に英學を教授す、尋で同氏より書信ありて父と橘恭平とを招き、其の教授を補助し學資を得よとの事を教ゆ。父は欣然之に従ひ鹿兒島に至る。

此年、徳川幕府の威望漸く振はず、諸侯は個々に兵備を修め自ら護るの形勢となれり、學友前島氏大に見る所あり、鹿兒島を去り幕府に仕ふ、去るに臨み他日或は戰陣に相見ゆることあらんとの旨を告げ以て父を激勵す。（六年の後明治四年父は兵部省に前島氏は大藏省に在るとき大阪にて再會す）

天下の形勢父を刺戟し雄心勃々たりしが、偶々西郷隆盛氏坂本龍馬氏等と國府溫泉場に會合したるを好機とし、父は頻りに海防の急務なる所以を説いて曰く、外警頻りに至るも目下諸侯の有する兵力にては、一國の安寧を保つに難し、須らく急に海軍を起すべし。幕府にして諸侯を統率するの任に適せざれば、宜しく之

を除き、保安年代以前の古制に則り、兵政兩權を皇室一途に歸せしめ舉國一致の實を現すべし、余は已に多少海軍術を講究し得たり、更に進みて之を講究せんとするも學資足らず、此の空乏の窮措大たるを如何せん云々と、西郷氏掌を拍て之を是なりとし、周旋盡力島津侯に説き、父をして再び長崎に出て同地の薩邸に在りて勉學することを得しむ。

父は身を長崎の薩邸に置き、港内碇泊の英國軍艦アゴス號に通學し、一意海軍術を研究せしも意に滿たず、遂に艦長ラオンド大佐に請ふに、其艦に寄乗せしめられんことを以てす。

艦長肯かず、曰く足下は薩藩の武士なり、武士を我艦に寄乗せしむるは幕府の猜疑を招かん。足下にして若し武士ならざりせば云々と、父は艦長の面前にて突嗟に佩刀を海中に投棄し、今日只今我は武士ならざる身となれり、請ふ武士ならざる余に、寄乗を許し教ゆる所あれとて熱心其面に溢る、艦長嗟嘆すること稍久し。豫て篤志の青年なりと信ぜしに果して、此の如しとて遂に其寄乗を許し、日

夜教導愛撫至らざる所無し。

此のアゴス乗組の分隊長三人の内、最年少のチャールトン大尉は其後累進して海軍大將となり、チャタム鎮守府司令長官となられたが、私が明治三十三年大尉で軍艦出雲廻航の爲、英國出張の際、その出雲が、チャタム軍港を訪問した時であつたが、井上敏夫艦長が鎮守府に司令長官を訪問すると、長官は話の切れ目に「今度新たに、倫敦に着任せられる日本の公使は林さんと云はれるが、元は海軍出身ではないか、嘗つて自分が日本に參つたとき、軍艦アゴスに林と云ふ若い武士が乗艦したことがあつたが——」

と語られた趣で、艦長は、これを私に話されたので、私は、

「公使は林董（後の伯爵）さんで、アゴスに乗艦して居つたと云ふのは、それは私の父のことだ」

と話した處、チャールトン長官の希望で、私は長官に會ひ、色々當時の話を聞かされた。

私が出雲で歸朝後、これを父に話した處、父はよく之を記憶して居り、
「三人の中若いチャールトンが一番有望であつた様だつたが、果して司令長官
に登られたか」と我事のやうに喜んで居た。

此年冬幕府は第二回征長の師を起す、毛利氏は大に之を憤り、兵氣は愈よ振ひ
封境に迫るの幕軍を悉く撃退し攻守其勢を換ゆ、諸侯は再征の軍に名無きを鳴ら
し、幕命を聴かざるもの多く、幕軍頗る振はず、是等の内訌小紛亂はアゴス號の
甲板上に在りて、天下を睥睨する一青年將校の眼に如何に映じたであらうか。

榎本武揚と海上に戦ふ

慶應二年 丙寅 齡二十五

此年夏、幕府は時勢の不可なるを察し征長の師を班へし威望全く地に墜ち、天
下の形勢一變せり。薩長首謀して藝土と結び、王政を復古し軍制を定め國是を開
國進取に一定し、各國競争の間に自存するの道を講ぜんとす。

此目的を貫かん爲には兵力を用ふるも辭せずとし木戸（長藩）大久保、西郷（薩
藩）辻（藝藩）後藤（土藩）の五士、數次會合して畫策する所あり、然るに他藩は
首鼠兩端を懷き、一も定見なきもの、如く、情勢自然に勤王佐幕の二派に分る、
天下の人心恟々たり。

この冬アゴス號が兵庫港に在泊中、薩侯の側用人吉井幸輔氏（後の伯爵）來り
て父に告ぐるに即刻退艦して鹿兒島に至り、豫め選抜しある子弟に海軍術を教授
されたま旨を以てす。

且つ曰く往年國府温泉場に於て、足下の西郷に説きし所は實に先見なりし、其
先見即ち今日に中れり、弊藩急に軍艦を購入せんとす。先づ一汽船を購して之を
足下に委託し、海軍の任に充つべき乗員を養成するの急務なるを感ず足下請ふ、
己に修め得たる足下の海軍術を之に授け、以て藩海軍の骨子を速成することに力
を盡されたし、此請は小松國老の命に依る。西郷、大久保二氏は今京に在り、足
下の入京するを待ち相共に歸藩せんとす云々と。

父は辭するに其修練仍ほ半途に在り英艦長と約あり、身一たび英國に航し、他日の大成を期したしとの意を以て辭退したるも、吉井氏聽かず、頻りに退艦を慫慂す。父は沈思島津侯より受けたる隱恩に感じ、義に於て拒絶し難しとし、遂に英艦長の肯諾を得て心ならずも吉井氏に従ひ入京す、滯京數日の後西郷、吉井二氏と共に鹿兒島に歸り、汽船三邦丸を練習艦とし、大砲其他の兵器を備へ選士十五人（井上良馨元帥は其一人なり）に海軍術を授く。

慶應三年 丁卯 齡二十六

春京都よりの 御召に應じ島津久光上京あり、父の指揮する所の三邦丸を以て其乗用に充つ、伊達宗城侯も亦之に便乗す。

父は久光公に説く所あり其の囑託を受けて、松方正義氏（後の公爵）と共に、長崎に至り外人を介し、薩藩の爲めに軍艦一隻を購入す、春日是れなり。十月春日を馬關に繫留し置き、父は單身入京し、久光公に侍する傍ら、所在の志士と交はる。

十月十四日慶喜公大政を奉還し、十一月二十四日將軍職をも辭するに至れり。

坂本龍馬從容として父に告げて曰く「將軍大政を奉還するも天下の現況は危機一髪の間在り、而して四藩一致の運動も内實二派に分れんとす、薩長は痼疾を治するは劇薬を用ふるに如かずとし、藝士は溫和手段に依り局を結ばんとす、緩嚴何れにするも幕府との開戦避くべからず、足下は必ず此戦争に干與せずして我海援隊を率ゐ、早く蝦夷地に至り内亂に顧みず、大日本國の爲めに、一意海軍術を練磨し且つ其子弟を養成せよ、異日外敵と戦ふの日に忠死すべく、今日の内亂の爲めに死すべきにあらざるなり、内亂は直ちに鎮定せんのみ」云々と、（坂本龍馬氏よりの此勸告は巻頭に掲げたる父宛ての書簡にも見ゆ）

父は坂本氏の言に首肯するも、薩藩との親交は避くべからず、約する所ありて京阪の間に滯在し小松帶刀氏の出京を待てり。

父の滯京する間に藝藩士船越壽左衛門翁と交はり其知遇を受く、翁曰く我老ひたり我嫡男衛（後の男爵——現男爵の祖父）用ふべし。彼不日廣島より此地に來

るべきを以て、足下請ふ彼と力を協せ國家の爲めに忠節を竭せよと、父を愛すること實子の如く、父も亦翁を欣慕すること實父の如し。

十一月十四日父は大阪に在り、其時在京せる坂本龍馬氏の急使を受け、十六日未明伏見に着し直ちに入京し、坂本氏の旅宿に至るや驚くべし、坂本氏は流血淋漓の裏に斃れ石川清之助（中岡慎太郎）半死の間に在り、其の語る所に依り夜半暴徒三名の襲撃を受けたることを知る。坂本氏の従僕某亦大聲を放ち苦悶しつゝ、ありしが其日正午死し石川は翌日絶息せり、慘澹極まれり、敵は何人なるや知るべからず、父は在京の同志と謀り三個の屍體を鳥邊野に埋葬す。

十二月 朝廷島津侯に命じ三條卿以下五卿を筑前より迎へしむ、父は侯の命を受け西郷従道、大山巖二氏と共に馬關に至り、軍艦春日に乗組み博多に回航し五卿を迎へ入れ、航して兵庫に至り、尙ほ陸路五卿を護送して二十七日入京す。

十二月二十九日江戸より飛報あり、曰く幕府は薩邸を焼き、薩士の殺害せられたるもの多しと、又在兵庫の春日よりの報に曰く、幕府の艦隊、兵庫港を封鎖し

同地に在りし、薩の運送船二隻發航したるに、砲撃を受けて歸港したりと、西郷怒りて曰く幕府の暴行顯然たり、朝廷に奏聞し問罪の兵を起さざるべからずと、座に在りたる黒田清隆氏等之を聞き手を拍ちて快哉を叫べり。

慶應四年（明治元年）戊辰 齡二十七

正月二日薩藩其砲隊長赤塚源六、同伊東祐磨の兩士を、春日の艦長及び副長とす、其他東郷平八郎、井上良馨（後の元帥）等四五人の藩士にも其乗員を命ず。父は未だ公然薩藩の籍に入らざるを以て、艦長たるの任命は無けれども、其實同艦の安危は依然として父の指揮に一任せられたり、同日夜父は前記新任の諸氏と一行六人、淀川を下りしに幕兵の乗船無數陸續として上るに逢ふ、一行幸に事無く三日朝大阪の薩邸に着せり。

此際將軍は大阪城に據り、幕府の海軍は榎本武揚氏之を提督し、旗艦回洋以下六隻を率ゐる威を攝海に振ふ、兵庫への通路は海陸杜絶して通ぜず、父は直ちに他の諸士と共に小舟に乗り、死を冒して安治川口の關門に近づき銃を擬し強行通過

を期す、幕兵法れて敢て深く咎めず儀式的の問答に止め、故なく通行を許せり。
 此日、西の宮海上にて遙かに京都の方向に兵火の揚がるを見て、彼我兩軍の開戦
 を知り夜に入りて春日に到着す。

四日拂曉父は春日を指揮し平運丸、翔鳳丸の二船を護り敵艦隊の封鎖を破り兵
 庫港を出づ、此時幕府の艦隊は三日夜半阪地に火起る（薩邸の自火退去なり）を
 見て天保山沖に回航したる間なりしを以て、春日は幸にして虎口を脱し、紀淡海
 峡に至るや、敵艦回洋追跡し來り、阿波沖に及び砲を發せるを以て、春日は回頭
 之に應戦したり。

是れ父が積年研究し得たる海戦術を實地に應用するの始めとす、春日は五砲を
 備ふる小艦なれども速力は頗る迅し、此日十七乃至十八節を出だし、常に有利の
 位置を占めたり、回洋の二十四砲より放てる無数の彈丸も、春日に一彈痕を印す
 ることなく、黒烟徒らに無風の海面を蔽ひ、砲聲空しく清澄の天に震ふ、春日の
 放てる彈丸は其數三十八にして、敵艦に三個の彈痕を留めたりと覺ふ。交戦且よ

も暗に及び、勝敗決せず兩艦交綏す、春日は急行して六日朝鹿兒島に着し、京師
 の變を本藩に報ず。

父は今回の實戦にて幕府海軍の與みし易きを知り、嘗て春日が博多灣にて坐礁
 の際、被りし艦體の損傷は急ぎ應急修理を施こし、春日單獨にて攝海の敵を撃攘
 せんことを期す、乗員踴躍して之を快とす、正月十七日攝海に進ませしに敵影を
 見ず、蓋し將軍已に軍艦に乗りて東歸したる後なりしなり、是に於て春日は長崎
 に回航し、之を英人に託して上海なる造船所にて完全なる修理を施こさしむるこ
 とし、乗員一同上陸して其竣工を待つ。

四月、朝廷島津侯に命ずるに父をして軍務官に奉仕せしむべき旨を以てす、侯
 使臣を京師に派し之が猶豫を請願せり。

五月父は九州鎮撫使澤三位卿の命に依り、英艦セルヴェイヤ號に乗組み平戸近海
 の測量を監督す。

此月榎本武揚、幕府の軍艦七隻を奪ひ去りて北海道に至り、函館を根據とし奥

羽沿岸に出没し制海の權を握る。

「其意蓋し徳川氏の社稷を北海道に保持せんとするに在り、往年坂本龍馬氏の海援隊を以てする、蝦夷地保持説と旨を異にするも其轍は同じ、志士の見る所彼此符合するを見る」とは父の語る所なり。

七月十七日江戸を東京と改稱せらる、此月春日の修理成り長崎に歸着す。父は英艦を退き、豫て陸上に宿營せる其乗員を率ゐ之に乘組み、鹿兒島に回航し藩命を待つ。

或夜西郷隆盛氏、雨を冒して春日に至り懇勸父に求むるに春日に、藩兵三百を乗込ましめ、以て越後方面の敵地に向はんことを以てす。曰く、是れ紀律正しき軍艦を、運送船に代用するの擧に類するも幸に之を咎むる勿れと、父は之を快諾す。此出陣に際し西郷氏の勸めに依り、父は公然島津公の藩籍に入り、代々小姓の資格を有することゝなる。

春日は乃ち、西郷氏以下の薩兵を乗せ父の操縦の下に、意氣揚々鹿兒島を發し

越後に直行す、至れば新發田藩已に官軍に降りし後なりしを以て、之に兵力を要せず、柏崎に投錨し陸兵を上陸せしむ、西郷氏は新潟に接近せる阿賀川口の小村松ヶ崎に宿營す、父は西郷氏と謀り、陸上の戦を幫助するの目的の爲め、春日を以て鼠ヶ崎以西秋田に至る沿岸を砲撃すること二日間に及べり。(この時分に西郷氏より父に宛てたる書簡は卷頭に掲げあり)

九月迄の間孤艦を以て越後、出羽の海面を警戒し、外國船の賊地と交通することを制禁す、九月二十日、車駕京師を發し十月十三日東京へ着御あり、同月十五日仙臺歸順し、二十二日會津開城し、奥羽地方全く平靜に歸し春日の任務了りたるを以て鹿兒島に凱旋す。凱旋するや島津侯、父に急行闕下に至るべきことを命ず、曰く足下は朝廷より召さるゝこと三回に及べり、出征中なるの故を以て今日迄猶豫を請願したり、今回は速に奉命せざるべからず、と、父は之に従ふに異議なきも偶々病あり、長崎にて療養するに決し十二月鹿兒島を去る。

大村益次郎の死を歎く

明治二年 己巳 齡二十八

正月七日父、闕下に至る。命あり小艦和泉號の艦長に補せらる、父の意に滿たず辭せんと請ふ、更に命ありて兵庫の軍務官に奉職せしめらる、兵庫の軍務官とは當時に於ける事實上の海軍省なり。

此際、函館五稜郭に據れる、榎本武揚以下舊幕兵の勢仍ほ猖獗なり。父は兵庫の軍務官を擔任し海軍出師を完ふしたり、函館の賊尋で平ぐ。

月日不詳父謙三其名を清康と改む。

七月兵庫軍務官を大阪に移し舊西奉行所跡を以て之に充て、日ならずして之を兵部省と改稱せらる。

清康兵部權少丞を拜命し官祿二百七十石を賜はる。

八月大村兵部大輔、東京より大阪に來り清康に託するに、海陸軍創業の大任務

を以てす、清康知遇に感じ銳意之に當る。

九月四日夜兇徒あり、大村大輔を京都の旅館に襲ひ、面部及び足部を斬る。而部の傷は幸にして順治せしも、足部の傷は意外に深く重傷に變じ、大阪にて蘭醫ポードイン氏の畢生の治術を受けしも終に起たず、十二月非命の死を遂ぐ。清康之を看護し至らざる所なく、病床にて海陸軍制の要旨を謀議し畫策する所少なからず。

十一月大阪城及び其附近の地を兵部省に收め、兵營學校病院等を建設し、佛國陸軍の下士を雇聘し、教導隊を募集する等清康専心陸軍實地の創業に従事す、是に於てか清康は純然たる陸軍將校となれる觀あり。

明治三年 庚午 齡二十九

正月陸軍所及び軍事病院を大阪に設置する旨の公布あり、是より先、陸軍の創設尙早しとの論頗る有力なりしが、千萬語も一實行に如かず、大村大輔見る所あり清康に囑して之が實行を急がしむ。兵營學校等の建築已に半成し、山田顯義氏

兵部大丞として大阪に着任し、大輔の遺志を継ぎ、孜孜として清康を督勵する所ありて此の發令を見るに至れり。大輔の先見清康の實行相頼て以て、帝國陸軍の基礎を作れりと謂ふべし。

九月清康山田大丞と議し、兵は武士の常職たりし舊制を廢し、汎く人民一般より兵士を徵するの案を立つ、是れ當時に在りては容易に行はるべき事に非ず、清康自ら之を政府に説くの任に當り、先づ、京都の留守長官中御門大納言を説き伏せ尋で、東京に出て三條岩倉二卿に説き、山縣兵部少輔の確諾を得て歸阪す。此徵兵實行論に關しては藝州藩の船越氏陰に在りて大に幫助する所ありたり。

夫れから二ヶ年後の、明治五年十一月二十八日には、愈よ我國に徵兵令が制定發布せられたのであり、今年即ち昭和十七年には、正にその七十周年に相當するので、東條陸軍大臣の下に、盛大にその記念式典が舉行せられた次第で、父も嘸かし地下で歡喜の笑を浮べて居ることであらう。

十月二十二日兵部少丞に任ず

十一月遂に府藩縣士民に拘らず、身體強壯者を選抜し、石高一萬石毎に五人を大阪兵部省へ出だし、軍役に服せしむべしとの公布あり、是れ徵兵制度の濫觴にして、清康の建言其力多きに居る。

此月、長州内亂の殘黨大樂源太郎等餘炎を九州に揚ぐ。四條陸軍少將之が鎮撫として九州巡察使を命ぜられ、鳥尾小彌太氏及び清康は、伏見屯營の兵一大隊を率ゐ、之に同行す。

此行兵士をして小銃のみを携へしめ其佩刀を禁ぜしに、佩刀を禁ずるは武士に對する侮辱なりとの論ありしが、行軍數旬氣餒へ體疲るゝに及び、攜帶武器は小銃一挺にて充分なるを感じ、兵士皆清康の先見に服したり、是れ蓋し廢刀令の先驅たりしなり。

尙ほ、此行清康其頭髮を斷らしに、同行の木戸孝允を初め、兵士皆其便益なるを曉り之に倣ひしもの多く、四條巡察使以下一行日田に在りて越年す。

明治四年 辛未 齡三十

正月一行日田を出て、久留米川を下り久留米城に入り、更に柳川に轉ぜしに、到る處逆徒風靡し、銃に彈を裝することなくして九州平定す、筑前に出て博多より乗船し歸阪す。

七月十四日、藩を廢し一般に縣を置かる、八月兵部省を廢し陸軍海軍の二省を置かる、清康依然陸軍省に屬す、九月十三日陸軍中佐に任ぜらる。

此月大阪兵部省を大阪鎮臺とし、其分營第一を大津とし第二を高松とせらる。清康第二分營在勤を命ぜられ、高松城に營所を定め分營を實現するの勞に當る。

林家の籍を鹿兒島縣より大阪府に轉じ、大阪府士族となる。此月散髮脫刀の令出づ。

明治五年 壬申 齡三十一

正月阿波、長門、備前、宇和島の舊藩主より、各歩兵一大隊を高松に招集し、高松分營を實現せしめ清康其司令官たり、會々備前及び土佐の農民蜂起す、谷干城氏林有造氏之が鎮撫に力む、清康地方長官に告ぐるに兵は漫に動かすべからず、

之を動かせば必ず實用すべし、徒らに之を恐嚇の具とする勿れとの事を以てす。地方官此言を利用し説諭に力めし爲め意外に早く平定せり。

此夏、車駕九州四國に巡幸せられ、丸龜に於て清康に謁を賜ふ。西郷隆盛氏川村純義氏供奉員の中に在り、清康の陸軍に従事するを見て之を奇異なりとし、川村氏曰く足下は夙に身を海軍に委ね海軍の事に長ず、盍んぞ陸軍を去り海軍に歸せざるやと、西郷氏曰く、足下は我藩海軍の祖なり、而して陸軍に在るは恰も漁夫に農業を課するが如し、速に海軍に轉任せしむること、せん、と、清康曰く、余の陸軍に従事するは經歷の推移よりして不得止政府の命に従ふのみ、余の本意に非ず。向後の進退は兩賢哲に一任せんと笑ふて分る。

註、明治四年八月海軍省を置かれ其卿を缺き、勝安芳氏川村純義氏共に海軍大輔なりしと云ふ。

九月五日海軍中佐に轉任せしめられ、海軍省軍務局に勤務し水兵本部長を兼ねべしとの命あり之に従ふ。

十一月十八日海軍大佐に任ぜらる。

此月全國徴兵の制を公布せらる。

十二月曆を改め此年十二月九日を以て明治六年一月一日とせらる。

明治六年 癸酉 齡三十二

參議西郷隆盛以下征韓論を主持する者、其言の行はれざるを憤り相踵で懸冠歸郷す、陸海軍の將士之に従ひ去る者多し。

此年海軍提督府を長崎三原の兩地に置くの議あり、清康命を承け五月十三日東京を發し實地に就き其地點を選定す、長崎は稻佐砲臺を以てし三原は舊城郭を以てするの案を立つ。

註、此年十月二十五日勝安芳氏海軍卿に任ぜらる、川村純義氏大輔たること故の如し。

佐賀の亂と鹿兒島の亂

明治七年 甲戌 齡三十三

此年佐賀の名士江藤新平、島義勇亂を佐賀に起す。熊本鎮臺は薩の西郷大將以下の起つあらんことを慮り、之に備ふるを以て遠く大兵を動かすべからず、野津少將博多より混成一旅團を進め、熊本鎮臺兵の一部分は筑後口より佐賀に向ふ。

清康命を受け、鎮撫使大久保内務卿と議し軍艦雲揚を先づ發せしめ、別に海兵隊一隊を派遣す。清康も亦急行長崎に至り措置する所あり、海兵隊急進して時津より海路嬉野に出て、敵の不意に乘じ佐賀城を奪ふ。賊其根據を失ひ狼狽遁走したるを以て、陸軍兵の至るを待たずして事平定に歸す。

三月三十一日臺灣蕃地事務局を東京に置かれ、四月十五日其支局を長崎に置かる、清康其御用掛を并命し、長崎支局に在りて其事務を處理す。是れ臺灣蕃人が我琉球人の漂流者を殺害したるを以て、其問罪の爲めの出師にして絶海異域への懸軍に係り、艦船の差繰り、陸海軍兵員の補充、及び兵器彈藥其他軍需品の供給等、長崎に於て之を處理するの要あるに依る。

此役西郷從道陸軍中將出征都督たり、谷陸軍少將赤松海軍少將參事たり、兵員の乗船は東京丸、高砂丸、社寮丸の三隻にして護衛艦は日進（この艦長は私の實父澤野種鐵少佐であつた）孟春の二隻なり。此征蕃の一舉は日ならずして事了りしが、清國異議を唱へて國際問題となり、剩へ駐臺の陣中に熱病發生し都督參軍以下兵士の之に感染せざるもの殆んど稀なり。

東郷陸軍少佐命を承けて蕃地の實況を視察し、同じく病に罹りて長崎に歸り委曲を清康に告げて瞑す、清康急遽上京し東郷少佐に代りて、朝廷に復命し且つ速に全權大臣を清國に派し、樽俎の間に事局を結び、一日も早く師を班へすの得策なる所以を上申す、廷議之を納れ大久保内務卿を北京に派遣し、幸に平和の結局を見て蕃地の兵を撤退せしめられたり、十二月長崎支局を閉鎖し清康歸京し、海軍省の常務に復す。

明治八年 乙亥 齡三十四

三月故廣澤參議被殺事件の審判廷を開かる。是より先、其犯罪嫌疑者四名收禁

せられ疑獄久しく決せず、是時に至り清康其審判參座を命ぜられ審問百端の末嫌疑者は遂に無罪放免となる。

註、此年四月二十五日勝安芳氏元老院議官に轉任し、海軍卿を缺き川村純義氏依然海軍大輔として海軍卿たるの職に當る。

此年清國軍艦始めて我長崎に至る。又樺太を露領とし千島列島を我國領とすることの對露談判終結す。

十二月海軍省の運送船大阪丸、周防灘にて三菱會社汽船名護屋丸と衝突し、大阪丸沈没したる事件あり、清康其取調掛を命ぜられ審問に従事せしに、仲裁する者あり、會社は瀧山大尉以下死者の遺族に祭祀料を贈りて事落着せり。

此年、軍艦雲揚朝鮮にて江華島砲臺より砲撃を受く。雲揚之に應戦し砲臺を撃破し、其砲を奪ひて歸り報ず。之が爲め征韓論再發し世上頗る喧し。問罪の師を出すに内決す。この雲揚の艦長は少佐井上良馨氏であつて此の戦功に依り、明治十八年最初の授爵のあつた際、特にぬきんでられて當時の少將で、獨り男爵を授

けられたのだと聞く。

明治九年 丙子 齡三十五

一月二十二日、清康艦船韓地派遣御用掛を拜命し、陸軍の當局と議し兵員運輸のことを計畫せしに、廟議は輕舉國に益なきを慮り、特命全權大臣として黒田參議を京城に遣はし、詰問の末元山仁川の二港を開かして事止む。

二月軍艦淺間和船勢興丸を衝き沈没せしむ。清康其審査官を拜命し査するに曲全く淺間にあり、海軍省勢興丸の損害を賠償し和解す。

八月三十一日、海軍省副官兼軍務局長東海鎮守府司令副官を拜命す。是れ英國の制に倣ひたるものにして海軍省の事務を三分し、海軍卿の下に大少輔を置かず副官三人を置き、卿を輔佐し各自一局の事務を掌理することとせられたり。

此年山口縣士前原一誠亂を山口に起す。又肥後の士大野鐵平等黨を集め神風黨と稱し、火を熊本鎮臺に放ち、司令官種田少將を其居邸に殺害し亂を起す、朝廷兵を遣り何れも之を討ち平ぐ。

明治十年 丁丑 齡三十六

一月二十日、太政官大書記官を拜命す、是れ法制局を廢し法制官は皆太政官大書記官に任命せられたるものにして、其事務は依然として法制の事に屬す。

二月、車駕西巡して京都に駐る偶々薩の暴徒起る。川村海軍卿運送船高雄丸にて鹿兒島に急行し、慰諭する所あらんとせしに成らず。備後尾道に歸り電報して事の急なるを告ぐ、乃ち狀を、行在所に上り朝野騒然たり、暴徒等西郷陸軍大將を擁し、君側の奸を除くを名とし大舉東上す。山縣陸軍卿、東京大阪の二鎮臺に令して出兵せしめ、廣島熊本の二鎮臺をして戒嚴せしむ。

朝廷有栖川熾仁親王を派し、綏撫せんとせしに會々熊本鎮臺司令官谷少將より飛電あり。曰く賊の先鋒已に肥後の佐敷に至れりと、依て勅使の發向を止め二月十九日西郷以下を罪狀し之を征討するの勅下る、有栖川熾仁親王征討總督たり、山縣陸軍中將、川村海軍中將參軍たり。

二十一日電報あり、曰く賊徒已に熊本城下に至り本日午後一時十五分開戦せり

と。此時清康東京に在り、御召に應じ急行神戸に至り、同地に於ける臨時海軍事務局の事務を掌理す、事務は頗る多岐に涉り、命令報告其他の公務蝟集し、晝夜間斷無し、睡らざることを約二週日に及べり。

此役正面の官軍は博多より進み、熊本城内物資の缺乏せんことを恐れ之と聯絡急ぎ激闘數次に及べども、要地を固守する賊兵に遮られ容易に進むことを得ず。

三月二十日、黒田陸軍中將一軍を率ゐ、宇土より進み、高島陸軍中將別に一軍を率ゐ八代より進み、此二軍相合して敵の背面に迫るに及び、戦闘の局面一變し熊本軍との聯絡は此背面軍より通ずるに至れり、正面軍亦勢を得て奮撃突進するに及び、賊勢漸次挫け尋で熊本城の圍みを解き遁走す。

三月二十八日、臨時海軍事務局を神戸より長崎に移さる。清康は歸りて東海鎮守府の府務に従事すべきの命を受け即ち横濱に歸る、五月二十八日に至り鎮守府勤務を解かれ海軍省に復歸す。而して仍ほ隔日東海鎮守府に通勤す。

九月賊勢潰えて鹿兒島に奔り、城山に殲滅し西南の役茲に鎮定す。

十二月、軍艦雲揚同丁卯破壊に係る裁判の審判官を拜命す。兩艦長處罰せられて事結了す。

明治十一年 戊寅 齡三十七

一月、東海鎮守府司令副官を辭す、東京横濱に互るの數職を兼ね劇務に堪ふる能はざるの爲めなり、同月二十一日海軍將校以下の勳功調査委員を拜命す、是れ佐賀臺灣及び西南の役に従事したる者の論功行賞の爲めなり。

註、此年五月二十四日、川村純義氏海軍卿に任ぜらる。

十月英國國會議員リード氏來朝す、清康其接伴擔任を拜命し其事に従ふ、リード氏は我軍艦扶桑金剛比叡の製造を設計したる人なり。

明治十二年 己卯 齡三十八

五月、又臨時海上裁判を開廷せらる。清康其審判官を拜命し龍驤比叡の坐礁事件を審判したり。

同月、獨逸皇孫ハインリヒ親王渡來せらる、蜂須賀侯其接伴員たり、清康及び

桂陸軍中佐（故大將公爵）其伺候たることを命ぜられ之に従事す。

十月米國前大統領グラント來朝す、外賓接待禮式取調委員を拜命す。

明治十三年 庚辰 齡三十九

二月四日、海軍少將に任ぜられ、翌五日東海鎮守府司令長官に兼補せられ、海軍省副官兼軍務局長たること故の如し。

註、此年二月二十八日榎本武揚氏海軍卿に任ぜらる。

六月二十一日 聖上神戸より軍艦扶桑に召され、還幸につき同艦に乘組み供奉艦隊を指揮すべく清康に仰付けられ、乃ち扶桑に乘組み金剛磐城を率ゐる神戸に回艦し三艦長を帶同し京都に入り拜謁す。

七月二十一日神戸にて軍艦扶桑に 乗御あらせらる。清康三艦を指揮し同港を發し海上平穩二十三日横濱に 着御あらせらる。此時の扶桑艦長は、大佐松村淳藏（故中將男爵）金剛艦長は中佐伊藤雋吉（故中將男爵）磐城艦長は少佐坪井航三（故中將男爵）なりき、海路 還幸供奉の慰勞として紅白縮緬を賜はる。

十二月四日、東海鎮守府司令長官並に、軍務局長の職を解かれ海軍省副官に專任す。

明治十四年 辛巳 齡四十

此年露清國境問題起り、兩國の間危機一髪に切迫し、露國の老将元海軍卿たりしレケッス氏東海方面に於ける同國の海陸軍總督として來東す、然るに幸に戦端を開くことなくして事止みレケッス氏我國に來遊す、清康又之が接伴役を命ぜられレ氏と親交し得る所少からず。

註、此年四月七日川村純義氏再び海軍卿に任ぜらる。

六月十日、清康海軍省副官の職を解かれ、更に海軍省規程局長を拜命す。

本年 車駕奥羽及び北海道に巡幸あり、六月二十二日清康 御巡幸御用掛を拜命す。

此年國內政論喧し、或は民権を説き或は政治の可否を論じ國會の開設を請願する等是なり。政府參事院を設置し、又明治二十三年を期し國會を開設するの 聖

勅出づ。

明治十五年 壬午 齡四十一

六月軍艦迅鯨（艦長は私の實父澤野大佐）紀州和歌山沖に於て、米國軍艦と衝突す。清康其審判を命ぜられ審問するに過失は迅鯨にあり、行政處分として艦長の職を免じ、横須賀造船所に於て米艦を修理し事結了す。

明治十七年 甲申 齡四十三

此年海軍省の規程局を廢せられたり。同局は海軍の諸規則を創設改良するの任なりしが、今や結了を告げたるを以て之を廢し、其制定したる法規類は之を參議院の議に附せらるゝものとす。清康、川村海軍卿の内意を承け、參議院の事務に従ふ。

五月二十四日、參議院議員に任ぜられ、其軍事部に勤務し又外務部を兼ねぬ。

五月三十一日、海軍省御用掛を拜命せしが六月十二日之を辭す。參議院議員を本職とし、海軍省御用掛を兼職とするに類し、海軍將校の本分にあらず清康の意

に満たざるに依る（海軍少將たる以上は當然海軍省の勤務を本職とするの意）海軍省之を至當なりとし辭表を採用せられたり。

此年朝鮮國に變亂あり、我公使館を襲ひ我國人を殺す、參議井上外務卿往て彼の暴を責め我損害を賠償せしむ。

此年東海鎮守府を横濱より横須賀へ移さる、

明治十八年 乙酉 齡四十四

八月二十二日、國防會議々員を拜命す。

十月二十四日、清康參議院議員として、愛知縣知事と同縣々會との法規見解相違事件の審理委員を命ぜられ之を審判處理す。之れ地方民政の事に經驗なき武人清康の當るを欲せざる所なれども、職を參事院議員に奉ずる上は之を回避するを得ず、止むを得ずして之に當れり。是より武人は武を以て始め、武を以て終るを本旨とし議官を辭するの念熾なり。

此年十二月官制に大改正ありて、立憲政體を組織し、太政官を廢し内閣を樹て

各省の卿を大臣と改めらる、又法制局を復置し參事院を廢し、同院議員は一同元老院議員に轉任せしめらる、之が爲め清康も十二月二十二日、元老院議員に任せらるゝの命に接したれども素より之を受くるの意なし。

元來參事院議員たるの任命を受けたるは、海軍省規程局の事務を之に移轉したるの趣旨ありて存す、今や其事務も過半結了したるを以て、之を辭せんと決心せし時なり、更に元老院議員に轉ずる如きは武官の體面に關し、忍び得ざる所なるを以て即日之を辭し、養病の爲め伊豆地方に遊ぶ。

元老院議員から海軍省局長

明治十九年 丙戌 齡四十五

去年、官制大改正の爲め、西郷從道氏十二月二十二日を以て海軍大臣となる、伊豆に在る清康に書を寄せ、勸むるに海軍省會計局長たらんことを以てす、會計局長は主計總監を以て之に補するの官制なり、清康將官たる身を以て之に當るを

屑しとせず書信を以て之を固辭す。

西郷大臣電信を以て招く、清康其内意を知るも、歸らざれば禮に違ひ友誼に反くを如何せん、歸るや西郷大臣懇勸清康辭を卑ふして、海軍會計整理の局に當らんことを囑す、曰く海軍の會計は由來不完なり、余大臣の職に就き之が整理の局に當るべき人を求む、衆口均しく足下を推す、内閣同僚皆足下を適任なりとし余も豫てより足下を之に擬せり、足下が武官たる體面を重んずることは、余も之に同感なり、故に現行官制を改め少將を以て會計局長に任ずるの途を開かんとしたれども果さず、籲て思ふに國會開設の日も近し、願くは足下國家の爲め三箇年期し忍びて此難局を擔任せよ云々と。是に至り情誼上復た辭するを得ず、三箇年後の復任を條件として之を肯諾す、是れ一月二十八日の事なり。

この一條は最もよく父の性格を現はしたものと申すべく、今日で云へば樞密顧問官（親任官）にも似たらん元老院議員の職を辭して、當時少將相當官以上には進級出來ぬ主計總監に成り下り、最も難物と云はれた海軍會計經理を引受けたの

は、西郷大臣と樺山次官の強ての懇請もだし難く全く義理を重んじ、私と云ふ觀念を捨てゝの決意に基くものにて、私は深く父のこの心事に敬服したのである。

一月二十九日、主計總監に轉任し海軍省會計局長に補せらる。

政府は軍艦製造其他海軍擴張の資に充つる爲め、一千八百萬圓の公債を起す。清康之が計畫整理の任に當る。

明治二十年 丁亥 齡四十六

三月七日、臨時會計檢閱官を拜命し、海軍部内各廳艦船兵營等の會計事務を臨檢す。五月結了復命し、又之が整理に關する利害得失を具陳す。

明治二十一年 戊子 齡四十七

早春、西郷海軍大臣を介し大藏大臣よりの感謝を受く。曰く海軍省の會計は積年不完の攻撃を受けたるに今や收支の秩序正確となり、整理完成したり、大藏大臣之を満足とす云々と。其の功に依り勳二等に叙し旭日重光章を賜る。

明治二十二年 己丑 齡四十八

三月八日海軍少將に復任し同日海軍將官會議幹事を拜命す、海軍省會計局長の事務は同局次長たりし長谷川貞雄（故寺内元帥の舅）氏に之を引繼ぐ。

五月、官制改正あり將官會議幹事の任は大宦官房に移り、清康は更に海軍將官會議々員に補せらる。

明治二十三年 庚寅 齡四十九

五月二十三日、海軍技術會議々長兼海軍將官會議々長に補せらる。

九月海軍中將に任ぜられ、海軍大學校長兼海軍將官會議々員に補せらる。

明治二十四年 辛卯 齡五十

六月二十七日佐世保鎮守府司令長官に補せられ、七月三日赴任の途に就き長崎を経て十五日海路鎮守府に着す、軍港司令官坪井少將等軍禮を以て迎ふること甚だ恭し、翌十六日前任司令長官赤松中將より府務の引繼を受く。

此月清國北洋水師提督丁汝昌、定遠鎮遠等五隻より成立つ艦隊を率ゐ、我國に來航し歸途七月二十八日長崎に入る、清康佐世保鎮守府司令長官として提督以下

彼の將校を佐世保に迎ふ、翌二十九日丁提督、巡洋艦靖遠に乗り部下將校十數人と共に佐世保に至る、清康盛宴を張り之を饗す、應接禮あり猷酬甚だ樂しむ。

八月六日清國光緒帝の萬壽節なり、丁提督長崎に在て清康を旗艦鎮遠に招く。

清康部下將校を同伴し之に臨む、主客の友情益々篤し、丁提督歸國の後も數次書を寄せて清康の安否を問ふ、清康亦之に答ふ。

この際、丁汝昌より父清康に贈られし「一見如故」の扁額は、今尙ほ家寶として存す。

明治二十五年 壬辰 齡五十一

三月二十五日、海軍大演習第二期防禦官指揮官を拜命す、此大演習は、佐世保鎮守府全管内に亙る大規模を以て行はれ、攻撃軍の指揮官は有地品之丞少將なり、蓋し是れ帝國海軍創始以來の大演習にして、攻撃艦隊は帝國の有する全數を擧げて之を編制せられたり、五島玉浦の封鎖戦、竹敷要港及び佐世保港口の攻防戦の如きは、恰も實戦を見るが如く、將士の奮勵大に我海軍を利し、後年日清戦争

の豫行演習とも云ふべきものであつた。

此演習中清康胸膜炎に罹りしが、病を冒して戦務に執掌し、豫期の如く五月十日演習終結す。乃ち謂て肥前嬉野温泉に療養すること三週日にして歸府す。

九月下旬、恒例檢閲を行ひ、十一月上京し例に依り管下の情況を奏上す。

十二月十二日、佐世保鎮守府司令長官の職を免ぜられ豫備役仰付らる、新任司令長官井上良馨中將に府務を譲り、十二月二十八日任地を去り歸京の途に就く。

父の晩年

明治二十六年 癸巳 齡五十二

去年、大演習中治療を怠りし爲め胸膜炎未だ全治せず、橋本陸軍々醫總監の治を受け、須磨浦及び伊豆の熱海に療養すること七箇月、漸次健康を回復することを得たり。

佐世保鎮守府司令長官の職を退くや、清康に貴族院議員たるの内命あり、固辭

して受けず。其理由に曰く、一は専心病を治し後日有事のとき再び武人の本分を竭くさんとするの意と、一は武人は武を以て始終し、他を顧みず以て武人の節操を固守せんとするの意なり。

清康の操守する所は、萬延年間感ずる所ありて武を以て身を立てし以來、終身武を以て國家に奉じ、假令現役を退くも軍事上の研究を怠ることなく、以て終身官たるの面目を發揮し癡疾老羸にあらざる限り、何時にても一令の下に蹶起し、其本分を竭くさんとするに在つたのであつて、私にもつくづく、その心情を語られたことがある。

明治二十七年 甲午 齡五十三

五月、韓國に内亂あり、清國政府は此機に乘じ、韓國を併呑するの宿望を遂げんとし、大兵を韓土に派遣して其内政に干與し其政府を威嚇す、我國固より之を黙視すべきにあらず、亦兵を京城に送りて我居留人民を保護す、彼我折衝の結果交讓成らず、遂に七月二十五日豊島の海戦ありて八月一日宣戦の 詔勅下り、九

月大本營を廣島に進めたまふ、

其十七日黃海の海戦ありて我艦隊勝利を得たり。

我陸軍は七月二十九日牙山に戦ひて克ち、九月十六日第一軍平壤を略攻し敵を追撃して、鴨綠江を渡り十月二十五日九連城を抜き、連戦連勝、鳳凰城を取り海城及び牛莊を占領す。

第二軍は花園口に上陸し、金州城を抜き大連を取り、旅順の堅壘を一撃の下に奪取し、北旋して遼東半島を席卷し了りて第一軍と合し、遼河を越え田庄臺に敵を窮迫し勢ひ山海關を壓す、敵の殘艦は旅順の根據を失ひ、對岸の威海衛に竄入して復た出て戦ふの力無し。

我艦隊直接に之を封鎖監守し、或時は夜陰に乘じ、水雷艇氷雪を冒し防材を突破して港内に入り、定遠を沈め來遠を屠り、或時は白晝に於て艦隊威武堂々港口に迫り、日島の砲壘を破壊し彈雨を劉公島に下す、別に陸軍第二軍の枝隊を山東治營城灣附近に上陸せしめ、咄嗟の間に營城を抜き、進みて威海衛の陸方面を總

て奪取し、劉公島をして孤立無援の地に陥らしむ。

明治二十八年 乙未 齡五十四

劉公島を根據とする敵艦隊勢塞まり、亦如何ともする能はず、二月十二日降を我艦隊司令長官伊東中將に請ひ、殘艦を交付し丁提督自殺して、威海衛全く我軍の有に歸す。

四月、清國の全權大使伯李鴻章、馬關に來りて我全權大臣と媾和を商議し、十七日條約成りて歸る。

此日、大本營を京都に移したまふ。

五月十日、京都大本營より清康に電命あり。曰く汝を召集すと。即日東京を發し大本營に至る。十二日吳鎮守府司令長官の職を授けらる。直ちに赴任し途中神戸に於て前任司令長官有地中將より、機密に涉れる府務の引繼を受け、十六日鎮守府に着任す。

吳鎮守府の要務たるや戦後艦船の修理、兵器の整理、從軍將士に對する論功行

賞、召集下士卒の解除等ありて、之を統率する司令長官の多忙甚し。清康天稟の精力を以て、日夜屈せず着々として之を處理遂行せり。

明治二十九年 丙申 齡五十五

二月二十六日、吳鎮守府司令長官の職を免じ召集を解かる。

是より清康身を閑地に置くことを得て、風月を楽しみ而かも武を忘れず、他日有事のとき重ねて國家に盡くすあらんことを期するの外、復た餘事に心を走らすことなし、以て武臣たるの素懷を始終する事を無限の快樂とす。

其自ら戒め又子弟を戒むるの書に曰く、廢藩置縣の當時を追想するに、武を武門の常職より解き、國民皆兵の實力を國に備へたるは最も可とする處なれども、惜むべきは古來武士たるもの、最も重んずべき、所謂武士道は廢刀と共に廢れたるにあらずやとの感あり、是に於てか明治の武は現に武官たるもの、常識として、其の武官は終身官たることを心肝に銘じ其現役たる否とを論ぜず、苟くも武士道に悖ることなく、數千年來の我國に於ける武の本分を忘ることあるべからず。

明治十五年一月四日の 聖勅は、古來の武士道を今日の軍人に遵守せしめたまふの 御深慮に外ならずと信じ、余は此武士道を實行しつゝ、棺を蓋はんと欲す云々と。

六月五日、特旨を以て華族に列せられ勳功に依り特に男爵を授けらる。

同月二十五日氏林を改め、祖先の本姓安保に復するの願書を牛込區長に提出せしに翌二十六日認可を得たり。

明治三十年 丁酉 齡五十六

一月四日復姓の旨を内務省へ届出で、公邊及び知人に向ひ之を發表す。其の發表せる由緒書に依り茲に安保家の略系譜を作ること左の如し。

武小廣國押盾尊、宣化天皇——曾孫、多治比王

王より以後世々多治比を以て姓とす

十七代の孫、丹治比直人實光

治承四年武功を以て武藏國賀美郡安保郷の地頭職に補せられ、安保次郎實光と稱す。源右府に仕へ西海東奥の役に軍功あり、驍勇にして威を東國に振ふ。爾來子孫安保を以て姓とし鎌倉幕府に歷事す。

十代の孫、安保次郎修理亮宗忠

文安年間安保城を退去し伊豫國司西園寺家の隸下に屬す。

後裔、安保宗實

永錄元年伊豫國より備後國御調郡向島西村千潮浦に移住す。

後裔、林金十郎宗繼

文化年間家を繼ぎ安保の姓を改め自ら林三友と稱し醫を開業す。

男、林金十郎宗清

友哉と稱す。父の業を継ぎ同じく向島に住す。

四男、林謙三即ち清康

明治二年名を清康と改め明治二十九年十二月二十六日安保姓に復す。

明治四十二年 己酉 齡六十八

十月二十七日、旭日大綬章を授けらる。

同日從二位に叙せらる。

同日薨す。青山墓地に葬る。

海の日

(出文協承認) 470046 號

昭和十八年三月廿五日 印刷
昭和十八年三月廿八日 發行

(五、〇〇〇部)

日本出版文化協會 會員番號 120116

| | | | | |
|-------------------|---------|---------|---------|------|
| 發行所 | 印刷所 | 印刷者 | 發行者 | 著者 |
| 東京市東區東水 | 東京市東區東水 | 東京市東區東水 | 東京市東區東水 | 安保清種 |
| 三丁目十二番地 | 三丁目十二番地 | 三丁目十二番地 | 三丁目十二番地 | |
| 電話九段(33)三三〇〇・三三〇一 | | | | |
| 振替口座東京七一二九七番 | | | | |

定價 二圓

元給配 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

東水出版社圖書目錄

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------------|---------------------------------|--|--|--------------------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------------|-------------------------|-------------------------|---------------------------------|-------------------------|---------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|------------------------------------|
| 皇國の書 詔勅講究所長 森清人著 一・五〇 | 人間 鍊成の吉田松陰 品川 義介著 一・七〇 | 海軍省文部省推薦 海軍 魂 海軍中將 植村 茂夫著 一・五〇 | 陸軍・文部・文協推薦 陸軍 魂 陸軍中將 和田 鎮治著 一・五〇 | くろがねの父 永松 淺造著 一・五〇 | 海軍航空隊 海軍少佐 富永謙吾監修 一・八〇 | 船は関ふ 元海軍少佐 安東陽一郎著 一・五〇 | 忍術と人 松波 治郎著 一・五〇 | 日本名将傳 松波 治郎著 一・五〇 | 若き義勇軍 田村 直治著 一・五〇 | シンガポール 卅五年 西村竹四郎著 二・三〇 | 海釣り三昧 谷口 北海著 一・七〇 | 將棋上達四週間 八段 小泉 兼吉著 一・五〇 | 將棋名局を語る 八段 金子金五郎著 一・五〇 | 將棋と人生 名人 木村 義雄著 一・七〇 | 長篇 小説 鐵の愛情 諏訪 三郎著 一・三〇 | 愛は惜みなく與ふ中河 與一著 一・五〇 | 科學 小説 海底トンネル 永松 淺造著 一・八〇 | 忍術から スパイ戦へ 寺島 征史著 一・八〇 | 明日の海 海軍大將 安保 清種著 二・〇〇 | 海を征く 海軍大將 高橋 三吉著 一・五〇 | 航空魂 (近刊) 陸軍中將 江橋英次郎著 一・五〇 |
|--------------------------------|---------------------------------|--|--|--------------------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------------|-------------------------|-------------------------|---------------------------------|-------------------------|---------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|------------------------------------|

送料各册内地一錢五分・外地二錢





又水社刊

¥2.00

